

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

特240

690

書第七輯

眞言密教の要諦

古義眞言宗學務部

始



特240
690



教學文書第七輯

密教の要諦

古義真言宗學務部



眞言密教の要諦目次

一、緒言

イ、言説の教化……………(一)

ロ、随時随所の教化……………(四)

ハ、家の宗教と人の宗教……………(八)

ニ、教化の三階段……………(一一)

二、總論

イ、教化の原理……………(一三)

ロ、眞言宗の三殊勝……………(二二)

ハ、包容主義……………(二五)

ニ、現世主義……………(三五)

ホ、積極主義……………(四〇)

へ、實修實行の力……………(四六)

三、別論

イ、皇室と眞言宗……………	(四九)
ロ、日本帝國と眞言宗……………	(五三)
ハ、佛身論の特色……………	(六〇)
ニ、生の宗教……………	(七六)
ホ、眞言宗の戒法……………	(八〇)
ヘ、菩提の行……………	(八六)
ト、祈禱の眞意義……………	(九二)
チ、追善回向の意義……………	(一〇二)
以上……………	

眞言密教の要諦

古義眞言宗學務部編

一、緒言

イ、言説の教化

現在日本に行はれて居る佛教各宗の人々が其教義信仰を説いて居るのを聞いて見ると、
 どの宗旨も皆自分の宗旨の特色を發揮するといふ事が眼目になつて居るやうに思はれる。
 即ち眞宗は純他力といふことを自分の宗門の特色として盛に未來往生を説いて居る。
 日蓮宗は法華一人唯成佛で、法華でなければ佛にはなれないといふやうなことで、
 法華の特色を説いて居るし、禪宗は坐禪によつて精神を鍛練し、生死岸頭に立つて泰然

二
として動かない大安心を決めるのは禪宗に限るといふやうな風で、この宗旨も皆自分の宗門の特色を説くことに力を入れて居るやうであります。従つて我々眞言宗の流れを汲んで居る所の者も又た眞言宗の特色といふものを檀信徒に説き示すといふことが最も必要なことであります。元來宗門はその特色を持つことによつて初めて存在の意義があるので、この宗旨もこの宗旨も總て同じことだといふのでは別々に存在する意義はないのであります。そこで今回は我が宗門の特色は何處にあるかといふことをお話申上げて御参考に供したいと存じます。

大體眞言宗といふ宗旨は昔から三密宗と申しまして、我々が自分の修行の爲に佛を拜む時にも、布教傳道をする時にも身と口と意との三つが揃はねばならぬ。尤も安心和讃などには「一密怠ることなくば」といつて一密口唱といふことも説いてはありますけれども、單純な一密と云ふものはない。多いか少ないか他の二密が之に伴ふて居るから、嚴密な意味から云へば矢張り三密であります。我々が在家の方々にこの眞言宗の教を説

いて行きます上にもまた身口意の三つの方面から教化をして行かなければならぬ。即ち體の說法、口の說法、心の說法、かういふ風に三業の說法といふことが必要だと思ふのであります。併しこの三業の說法の中で一番行ひ易くて聽く人に解り易いのは口の說法であります。この娑婆世界の人間は一番耳が敏いから耳に訴へるといふことが一番利き目が多い。その耳の敏いといふことに就て楞嚴經の中に三つの特長を擧げて居ります。一つは通つうといふのです。眼は壁があつても向ふが見えぬ。障子があつても向ふが見えぬ。所が耳は壁越しにでも障子越しにでも聞えるから眼に比較して耳の方が遙かに働く範圍が廣い。これが耳の一つの特長だといふのです。それから一つは圓まといふ。眼は前を見たら後ろが見えぬ。右を見たら左が見えぬ。上を見たら下が見えぬ。然るに耳は前からでも後ろからでも、右からでも左からでも、上からでも下からでも、ごつちから言つても聞えるから耳の働きは眼の働きに較べて遙かに働く方面が廣い。これが耳の一つの特長だといふ。それからもう一つは常じょうといふ。眼で見た事よりも耳で聽いた事の方が

よく覺えて居るといふのです。私共の考ではどうも聞いた事よりも見た事の方がよく覺えて居るやうに思ひますけれども、兎に角お經にはさうなつて居るのであります。

四

□、隨時隨所の教化

そこで我々が在家の人々に教を説いて行きます上にも耳に訴へるといふ行き方、即ち言葉の説法といふものが非常に重要な役割を持つことになる。さうなりますと耳に訴へるといふ教化の役目を勤めて行きます上に多數の人を一堂に集めて話をする講演や説教も無論必要なことに違ひありませんけれども、本當の教化といふものは膝突き合せて話をする個人教化が一番効果が多いのであります。私は眞言宗に布教師といふ一つの階級があるといふことが布教の振はない第一の原因だと思ふ。大體一箇寺の寺院住職といふものは皆布教師でなければならぬ筈である。上手だとか下手だとかいふことはありますけれども、上手でも下手でも一寺住職である以上はその檀家、信者に對して教を説かね

ばならぬ責任がある。それを皆やらなければならぬ。皆やらなければならぬことを、布教師といふ者に一任し、それが年に一二遍廻つて來て布教して、それで宗旨の布教が濟んだといふやうなことでは宗旨は決して振ふものでない。多數の人を集めて話をする場合に話が下手であつたら皆が聞きませんから上手な人にやつて貰はなければならぬけれども、膝を突き合せて話すのであつたならば上手でも下手でも行ける譯です。眞言宗の教化を行届かせるやうにするには隨時隨所の教化を盛にやらなければならぬ。それをやるといふことになる。檀家務といふことが宗旨にとりて最も重要な任務になつて來る。都會などでは近頃は佛事の際に食事を出さぬやうに段々改善して行つて居りますが、それにして話をする時間があるだらうと思ひます。私共が田舎に居りますと、法事に行きましてお經が濟んでから御飯が出て來る。所が田舎の人は氣が悠長なからお勤めが濟んで三十分経つても四十分経つても御膳が出て來ないことが度々ある。食はずに歸れば宅が貧乏だから食うて呉れぬといつて小言が出るし、さればとて早くお膳を出せとお客

五

さんの方から催促するのも無作法なことであるし、其間のキマリの悪いことは實に何とも云へぬ心地がする。そこでその時間を利用して座談的に布教するとまことに都合がよい。どんな人にも善い所といふものがあるものですから、さういふ點を掴まへて、今日の法事の人は何時やらうちの寺へ来てかういふ話をした事がある。かういふ事をしたことのある感心な人だつたと、その人の善い所を話の種にして、そこらに集つて居る親戚の人とぼつ／＼佛法の話をして行く。さういふ風に親戚の人々と話をして居る中に段々心安くなつて、向ふも色々な質問をする。こちらもそれに答へて行く。さうすると御飯が出て来るのを待つ時間に布教することが出来る。此の隨時隨所の教化を實行すると布教が徹底すると思ひます。

檀家務の話の序ですが、どうも眞言宗の僧侶はこの檀家務といふことを多少輕々しく思ふ傾きがありはせぬかと思はれます。同じ僧侶でも本山の役員を勤めて居る人とか、學校の教師をして居る人とか、巡回布教をして居る人とか、さういふ人よりも檀家

ばかりを毎日勤めて居る人は一段下つた地位にあるやうな感じを持つて居る。自分にもわしは檀家坊主だからと云ふて卑下する。他の人もあれは檀家ばかり勤めて居る人だと云ふて輕視する。私はこれが眞言宗の振はない一つの重大な原因であると思ひます。檀家務といふことは一宗の基礎である。これを疎かにして宗旨が盛になる理窟はない。人によるとかう言ふ人がある「君の寺の檀家が今度天理教に改宗したのが一軒あるぢやないか」「なーに一軒や二軒改宗したつて」とかう言ふ。所がその肚の底はどうかといふと、一軒や二軒檀家がなくなつても食ふには困らぬといふ氣がある。私はこれは食ふとか食はぬとかの問題ではないと思ふ。お大師様から預かつて居ります檀家が改宗すると云ふことは住職として重大な責任であります。それを食へる食へぬの問題のやうに考へるといふことは大なる心得違ひである。出来るだけ努力されても改宗するといふのならば仕方がないけれども、一軒や二軒改宗しても食ふには困らないといふやうなことを考へるといふことはお大師様の末徒として相濟まぬことである。唯單純な信者と違つて

檀家といふものは祖先以來其寺と長い間の關係をもち信仰の上から深い因縁がある宗門の根本基礎でありますから、檀家務めと云ふものは非常に重大な意味のある尊いものであるといふことを眞言宗の御互が一般に本當によく知らなければ宗旨は盛にならないと思ひますが、ごうもこの點を多少輕んずるやうな傾きがあるのは宗門のために甚だ遺憾なことであります。

ハ、家の宗教と人の宗教

檀家を大切にして檀家務の時にその檀家の人とか或は檀家の親戚の人にこの眞言宗の教を説くといふことになること、そこに起つて來るのが家の宗教と人の宗教といふ問題であります。一面から云ふと宗教は個人的のものでありますから日本でも憲法第二十八條に於て信教の自由といふことを制定せられて居る。國家の安寧秩序を防げず又臣民たるの義務に背かざる以上は、如何なる宗教を信ずることもそれは個人の自由である。併しな

がら他の一面から云へば日本は家族制度の國で家が國の單位であるから家の宗教といふものがなければならぬ。所が家の宗教は眞言宗であるが、その家に住居して居る家族の宗教はと調べて見ると、主人は眞言宗であるが、奥さんは天理教、息子は金光教、娘は耶蘇教といふやうな風に家の宗教と人の宗教とが一致しない家が相當あるのです。これは甚だ遺憾なことでありますから家の宗教と人の宗教とを是非一致させるやうに我々が努めて行かなければならぬ。蓋し宗教といふものは人間の精神の奥深く食込むものでありますから、家族の宗教が二つにも三つにもなりますと家族の精神を統一する上にも非常に工合が悪い。又實際問題から考へても葬式や追善の場合に主人は眞言宗、奥さんは天理教、息子は金光教、娘は耶蘇教と別々に行ふことが出来るものでないからごうして家の宗教と人の宗教とを一致させるやうにして行かなければならぬと思ひます。

それからもう一つ我々が考へなければならぬことは眞言宗にもチヨイ／＼ある事です、改宗する家がある。さういふ家で誰が一番先に改宗するかといふと大抵奥さんで

す。女が多い。家は真言宗であるが奥さんが天理教に凝り固まつて終ひには主人や子供達迄も引つ張り込んで天理教に改宗する。これまで改宗した家を調べて見ると大抵婦人が一番先に立つて居るやうに思ふ。私は一昨年福山で真言宗の婦人講習會があつた時に三百人程の婦人に向つて言つた。あなた方は真言宗と縁を結んで居るのであるから真言宗の尊いことをよく知らなければならぬ。真言宗のことを十分御研究になり、それから他の宗旨のことを御研究になつて、これとこれとを較べて見ればこの方がこれだけ勝れて居るからこの方に改宗するといふのならばそれでよろしいけれども、今迄の家の宗教である真言宗といふものがどんなものやらさつぱり知りもしないでにおいて、真言宗を捨て、他宗に奔るといふやうなことは一體考のある人間のする事ではない。それだから真言宗の流れを汲んだ家庭の婦人は宗旨の尊いことをよく知つて戴かなければならぬ。子供の教育をなさるに付ても、婦人自らが真言宗の宗旨の尊さをよく知つて居らなければ子供の宗教教育といふものは決して出来るものでない。色々な點から考へて婦人が自分

の家の宗旨の有難さを知るといふことが最も必要であるから一つ本腰で宗旨の話を聴いて戴きたいと言つて、不足を言つたり頼んだりした事があります。かういふ事も教化をする上に於て一つ御参考にして戴きたいと思ふのであります。

二、教化の三階段

理想的の教化といふものは三つの階段があります。これは口で言ふと何でもないことのやうであるが實際はなか／＼むづかしい。第一が理解といふこと、よく解る話でなければならぬ。よく解るやうに話をするには専門語を使つてはいかぬとか、矢鱈に外國語を使つてはいかぬとか、時代に合はないやうなことを言つてはいかぬとかいふやうな色々心得て置かねばならぬことがあります。兎も角要する所よく解るやうに説いて聴かせるといふことが必要であります。併し、宗教と云ふものは人間の智識欲を満足させるのが目的ではないのだから話が能く解ると云ふ程度に留まつてはならぬ。更に進んで感

激を起さしめねばならぬ。

なにこのおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼる、

これは感激である。理窟でも何でもない。それからその次には、よく解つた。感激を起したといふだけではいかぬのであつて、その感激からして今度はあれならわしにでも出来るから一つ實行して見ようと云ふ心を起さしめねばならぬ。理想的の教化といふものはこの理解と感激と實行の三つが揃はなければならぬ。そこで、例話などを擧げる時に餘り高遠なものは宜しくない。聞いた人が、よい話だけれどもわしには逆も實行は出来ないといふ感じを起したならば百日の説法も何の効果もない。私も若い時には高遠な話をするを好んでやつた。例へば禪宗の甲斐の惠林寺の快川和尚が、焼き殺される時に「安禪は必ずしも山水を須らず。心頭を滅却すれば火もまた涼し」と末期の一句を述べて、泰然自若として死んだと云ふ話などは聽いて居つても洵に壯快なことであるが、

聽いて居る人々は火で焼き殺されるやうな事のある人でない。又梅尾の明惠上人が、北條泰時に對し拙僧のする事が政道の邪魔になるならば此の首を打てと言つた話も痛快な實話であるが、聽衆の中にソンな目に逢ふ人は居らぬから快川和尚や明惠上人が偉い人であつたといふ話ならばそれでよいけれども、聽衆に向つて之を實行の手本にせよと云ふことになる話が高過ぎて俗にいふ二階から目薬で何の利き目もない。さういふ事で私も大失敗を経験したことが度々あるので、近來は此様な話はせぬことに致して居る。例に引く話は成るべく低い話をせねばならぬ。あれならわしにでも出来さうな思はれるやうな話を例に引かなければならぬ。

二、總論

イ、教化の原理

眞言宗の教化の根本原理は何であるかといふと私は二而不二の道理と、果上の法門と

佛地の三昧との三つが眞言宗の教化の根本原理であると思ふ。二而不二といふことは私
 が申上げなくとも御承知の通りであるが、動もすると眞言宗の布教をする人が不二とい
 ふことを頭から言ふ。眞言宗は不二の眞理を説く教だとかう言ふのです。凡聖不二とか
 淨穢不二とか言つて頭から不二といふことを説く、これは甚だ輕卒な説き方であると思
 ひます。大師様が不二と仰しやるのは先づ一應は二といふものを認める。又大師様が認
 める認めぬに拘らず。此の現象世界といふものは二といふものが表になつて居るのであ
 る。早い話が今度の支那事變でも平和と事變とかういふ風に表が二つになつて居る。表
 が二つになつて居りますから出来ることならば平和を望みたい。望みたいけれども已む
 を得ぬから事變といふものが起つて來たのである。そこで平和といふものと事變といふ
 ものの二が表面に現れて居る。これは事實です。或は健康と病氣、これも表面はやはり
 二つになつて居る。それを病人の所へ行つて病氣と健康とは不二のものだと頭から言つ
 た所で、病人からいつたらちつとも不二なものでない。苦と樂とは不二だといつた所

で、苦しんで居る人は矢張り苦しんで居り、楽しんで居る人は矢張り楽しんで居る。先
 づ初めに二といふ事實を認めなければ不二の眞理は成り立つものでない。凡夫と佛様と
 は不二だと説いたのでは、聽いて居る人が、あの寺の和尚さんは佛様と同じか、それに
 してはお粗末な佛様だなどいふことになる。聽いて居る人も得心が行かなければ、又言
 うて居る本人も得心が行かぬ。さういふ教の説き方ではいけません。教といふものは先
 づ現實を認めなければならぬ。現實を認めた上に更に其の現實を見直す。考へ直すとい
 ふ所に宗教がある。現實を現實の儘にして終ひまで放任しておくのならば宗教はない。
 現實を現實の儘に見て、更にそれをもう一遍見直し、考へ直して、その現實の中から今
 度は本體の上に不二の眞理を見附け出すといふのが眞言宗の教の立て方であります。頭
 から本體論を出したのでは眞實の不二の眞理は現はれて來ぬ。これは不二の眞理を説く
 上では非常に大事なことであります。

大師も矢張り表で二といふことは認めてござる。二といふことを認めて、更にその二

をもう一遍考へ直し見直して不二の眞理を見付出し、之によりて二と現はれて居る現實問題の解決をして行かうと云ふのが大師の教であります。この不二の眞理といふことは非常に尊い眞理であつて、昨年私久米寺の講習に参りました時に、この寺は大師が大日經を御感得なされた尊ふといお寺であると思つて、大師様が不二の眞理を説いたお經文をお探しなされた當時のことを想ひ出しまして實に感激の涙に咽んだのであります。大師の御傳記を拜見致しますと、皆さん御承知の通り大師は不二の法門を求めらる爲に佛に誓願を立てたのは御年二十二歳の時であります。奈良の東大寺の戒壇で具足戒をお受けなされ、その時に不二の法門を求めらる誓願を起してござる。後宇多法皇御宸筆の大師傳を拜讀いたしますと「二十二歳具足戒を受く。即ち佛前に誓ひを起して」と御述べなされてあります。それで大日經といふお經が不二の法門であるといふことが分つたが、そのお經が何處にあるか分らぬので、十年の長い間不二の經典をお探しなされたのであります。尤もこれは大師の御傳記を見る見方が二つありまして、直ぐに大日經を手に入れた

といふ風に解釋して居る人もありますが、私共はさういふ風には解釋しない。それはなせかといふと、大師が唐から御歸朝なされて後兩部曼荼羅を建立なさる時にお書きになつた御文章の中にかういふ事を仰しやつて居ります。「弟子空海性薰われを勸めて還源を思ひとす。徑路未だ知らず岐に臨んで幾度か泣く。精誠感ありて此の秘門を得たり」、大師の御一代の御文章の中に「岐に臨んで幾度か泣く」といふやうなお言葉は外に類のないお言葉です。「岐に臨んで幾度か泣く」。かういふのだから、誓願を起して直ぐに大日經を手に入れたのであるならば幾度も泣く筈はないと思ふ。それで最後に久米の道場にお入りなされて「われ此の願を成就せざれば此の座を起たす」と御祈りなされた。相手方は目に見えぬ佛様である。三ヶ月で願が叶ふか六ヶ月で願が叶ふか、一年で願が叶ふか、但しは最後迄願が叶はぬかも知れぬ。さういふ一寸先暗がりの問題を持ち出して目に見えぬ佛様に向つて「われ此の願を成就せざれば此の座を立たす」と言ふた以上は靈驗のある迄は何時迄も祈り続けねばならぬ。言葉を換へて言ふたら、大師は佛の前に生

命を投げ出して願ひ求めたのである。その尊い不二の眞理を説いたお經文をお互は今日座布團の上に坐つて拜見することが出来るのである。それを考へて見ると私共は祖師の御恩の有難さに感激を起さずには居られない。昔の各宗のお祖師様方の法を求めめる態度は命懸であり本眞劍であつた。その命懸で大師が求めた所の眞言秘密の不二の法門、これを我々が世の中の人に説いて聽かせるといふことに付ては祖師の御精神といふものをよく汲み取らなければならぬ。さうしてこの教を總ての問題の上に活用して行かなければならぬ。それで私この頃各地へ講演などに参りますと事變に付てよく申すのです。平和と事變とを先づ二つに見る。二つに見たものを更にもう一遍見直すと、そこに弘法大師の説かれた不二の眞理といふものが現れて来る。この事變が出来た以上はこれを不二の眞理によつてもう一つ大きな平和の因になるやうにして行かなければならぬ。かういふ風にしてこの事變の問題を説くにも矢張りこの二にして二にあらざといふ大師の教によつて説いて行くやうにしなければ眞言宗の僧侶の話にはならないと思ふのであります。

す。

それからもう一つは果上の法門、眞言宗は果上の法門であると昔から言ふ。これは眞言宗の内輪の者が言ふばかりでない。南朝の忠臣北畠親房といふ方が神皇正統記といふ書物に書いてある。この書物は神代の昔から後村上天皇の御時代迄の事を書いてある。此書物の嵯峨天皇の條下に眞言宗と天台宗の事が書いてある。就中眞言宗の事を詳しく書いてある。その中にも矢張り眞言宗のことを「如來果上の法門にして諸教に超えたる極秘密なりと思へり」と述べて居る。この如來果上の法門といふことは又我々が在家の方に眞言宗の事をお話をする時には忘れてならぬ肝要な事であると思ひます。詰り眞言宗の教といふものは佛様の思召を有りの儘に説き、佛様の爲さる事を有りの儘に説いて居る所の教であるから、これを如來果上の法門といふ。如來果上の法門でありますから、我々が佛になる迄の間の必要な教といふのとは意味が違ふ。眞言宗の者が佛道を説くのはそこをよく注意して説かなければならぬと思ふ。佛道といへば意味を二つ持つて居

る。一つは佛に成る道、佛に成る道といふものは金持になる道とも違ふ。學者になる道とも違ふ。一種特別の道である。所が眞言宗でいふ佛道といふものは佛に成る道ではない。佛の行ふ道である。佛の行ふ道を我々も行はさせて戴くのであるといふのが眞言宗の教である。

それでこれを譬へて私は常に言ふのですが、佛道といふことを佛に成る道と解釋する宗教は汽車の切符のやうなものである。汽車の切符は大阪から京都迄行つたら向ふに渡してしまつてこちらにはもう無用のものとなる。これが他の宗旨でいふ所の佛道である。然るに眞言宗に云ふ所の佛道は懐ろの金である。懐ろの金は大阪で切符を買ふ時にも途中で辨當を買ふ時にも京都へ下車して後にも要る。そこで眞言宗の佛道は汽車の切符にあらずして懐ろの金であるといふ風に譬を以て説明すれば在家の方にもよく解る。手を合すことを在家の人に勧めるのもこれは我々だけがするのでない。佛様も手を合せてござる。佛様の爲されて居る事を手本として我々がそれを學び行ふのである。これが

眞言宗の合掌の意味である。佛様はかういふ事を爲さらないけれどもお前は凡夫だからしなければならぬといふのとは違ふ。眞言を唱へるのもさうです。佛様も眞言を唱へてござる。それを我々も唱へるのである。これが眞言宗の教である。それからお花を供へるのも我々だけがするのではない。極樂淨土に於て佛様にお花を供養するだけを本職として居る佛様がある。お燈明を供へる佛様もある。お香を焚く佛様もある。これが果上の法門である。眞言宗で佛前に供養をするのは此心持を以てせねばならぬ。佛の爲さる事をするのです。言葉を換へて言ふたら初めから佛の仲間入をするのである。斯く申しますと他の宗旨の人はなんでお互凡夫が初めから佛の仲間入が出来ると言ふかと言ふが、それは出来るのである。如來果上の法門といふのはそれをいふのです。この意味を我々が肚に持つて人に教を説いて行く必要があると思ひます。それから次は佛地の三味道、上に述べた通り眞言宗の法門は果上の法門であるから、此法門を信仰する者は初めから佛地の三味道に住するのである。解り易く云へば發心の始めから「我はこれ佛なり」と

の自覺を以て總てのこゝを行ふて行かねばならぬ。最初は完全な佛ではない。一年生ではあるけれども兎に角佛の仲間入をして居る。それだから佛の爲さる事を手本にして其通り行ふのである。この眞言宗の根本の建前といふものをよく我々が呑み込んで行かなければ同じやうに手を合すことを勧めても、お花を供へることを勧めても、外の宗旨で言ふのご心持の違ふ所が現れぬ。佛地の三昧に住して總てのこゝを行ふと云ふことになると、今度の支那事變に就てお互國民が國家の目的達成のために努力するのは、不動明王の三昧に住して惡魔降伏のために戦ふて居るのであると云ふ信念を以て努力せねばならぬ。此信念で努力する所に聖戰の意義が眞言宗の教義上から成立し、即事而眞、當相即道の意味が實際問題の上に生きて働いて來るのであります。

ロ、眞言宗の三殊勝

眞言宗の勝れて居るといふことを在家の方に解り易く説くといふことは最も必要なこ

とであります。誰にしても自分の宗旨が粗末だと思つて居る人はありませんけれども、これが本當によく解らないといふと尊い宗旨を捨て、新物の方に奔つて大變な間違を起すことになる。私はこの眞言宗が勝れて居るといふことを説く説き方にも色々あるだらうと思ひますけれども、餘り奥深い話は在家の方にはわかりにくい。覺鑊上人は密嚴諸秘釋の中に顯密不同頌と云ふものを書いて顯教と密教と違ふ點を三十七ヶ條ほど擧げて居りますが、在家の人に説くには六つかし過ぎる。そこで私は眞言宗が勝れて居るといふことを説くには眞言宗の歴史、眞言宗の祖師、眞言宗の教理、この宗史と宗祖と宗義の三つを話をしたら在家の方にもよく解ると思ひます。第一番に眞言宗の歴史であります。昔から天子眞言、公卿天台、大名淨土、武家禪宗といふ言葉があるほど眞言宗は皇室に深い御因縁のある宗旨である。この光榮ある宗門の歴史を在家の人に話をしたら眞言宗は尊い宗旨であるといふことがよく解ると思ひます。日本の國で申しますと今日の國民精神とい

ふものは何によつて出来たかといふと、遠く神代の昔から今日迄の歴史によつて養成せられたものである。それだから國の歴史といふものをとつてのけて國民精神といふものはあるものでない。眞言宗でもさうである。大師がこの宗門をお開きなされてから今日迄の歴史といふものによつて眞言宗精神といふものが出来て来たのである。國民精神を養成するには國史の教育に依らなければならぬといふのと同じことで、眞言宗の僧侶及び檀信徒が自宗の歴史を尊重する心がなければ逆も本當の眞言宗の話といふものは解るものでもなし。又眞言宗精神といふものが養はれるものでないから、宗史の話を充分檀信徒に説き聞かし、歴代皇室の御叙信の御事跡を伺ひ奉り、此宗旨の教義信仰を透ふして忠誠を捧げ奉るように教えねばならぬ。此の皇室と有難い御因縁に結ばれて居るといふこと。これが眞言宗の勝れて居る所以であります。

それから第二にはお祖師であります。これはもう私が申す迄もないことで、諸宗の祖師にも勝れた弘法大師、かういふ尊いお方をお祖師に載いて居ることは實に仕合せなこと

とであります。

それから第三には眞言宗の教理です。眞言宗の教理は最も深く教法は最も廣いので之を萬機普益の妙教と稱し、何人でも此教を信仰すれば皆悉く利益が得られるようになつて居るのでありますから、眞言宗は一切佛教の本家で、之を専門語で「横統一切佛教」と申すのであります。此の如く宗史と宗祖と宗義、との三つの點から考へて見たら眞言宗といふ宗旨が如何に尊い宗旨であるかといふことが能く解ると思ひます。お互に此三點を能く領解して斯る尊ふとき宗教を信する幸福を喜び、檀信徒の人々へ充分之を説き示して其幸福を共にするように努力せねばなりません。

ハ、包 容 主 義

眞言宗の者が信仰生活並に日常生活を營んで行く主義方針の立て方に就て眞言宗の教はごうなつて居るかといふ問題、これに就て委しく説けばいろいろありましようけれど

も私は在家を教化して行く上には三つでよいと思ふ。それは包容主義と現世主義と積極主義とであります。この三つさへ我々が肚に持つて總ての問題を説いて行けば現實問題の解決には非常に工合がよいと思ふ。先づ包容主義といふことは總てのものを取り入れ之を其の用ゆべき所に用ゐて各自の機能を發揮せしむることを言ふのであります。大師が非常に包容主義の御精神のお方であつたといふことは、大師がまだ出家なさらぬ以前にお書きなされた三教指歸を拜見しても分る。三教指歸は儒教と道教と、佛教との三つを比較なされて、儒教が一番低い。次は道教、佛教が一番高い教であるから自分は佛教の中に入るのであると仰しやつた。然らばその深くて尊い佛教の中に入つたから浅いものを捨て、しまふかといふとさうではない。最後の所に大師は「十韻之詩」といふものをお書きなされて、この三つは浅い深いの區別はあるけれども皆人生に必要な尊い教であると、チャンとこれを包容してしまつて最後の結論をお附けなされて居る。そこに弘法大師の思想といふものがよく解る。大師の目から御覽になればあれは要らぬものだと

か、これは役に立たないものだと云ふものは一物もない。何でも皆役に立つものである。この大師の包容主義の思想がずつと徹底して來たのが「十住心論」である。十住心論は三教指歸の思想が發達し洗練せられて出來た所の大著述です。此の如く弘法大師は包容主義のお方であつたから、優劣淺深の比較はなされたけれども、排斥することは絶待になさらない。他のものを排斥しなければ自分の價值が出ないといふのでは本當の價值ではない。總てのものを採り入れて行くといふことが弘法大師の偉い所です。又理論から考へてもこれでなければ眞理とは言はれぬと思ふ。この世の中に役に立たない物はない。皆存在の理由があるから物があり。必要があるから物がある。昔から必要は物を生むの母なりと云ふ通り、必要があつてこそ物が生れて來るのだから、生れた以上は必要のない物は世の中に一つもない。この理窟を考へたら捨てるべき物は天下に一つもない。唯用ゆべき場所を我々は知らぬからこれは役に立たない物だとか、これは用の無い物だとかいつて捨てるのでありますけれども、用ゆべき道を知つた者が用ゐたら何で

も彼でも皆尊いものであり、役に立つものである。「捨てられた笠に用あり水仙花」、農家としてはもう用が無いと思つて捨てた破れ笠でも、水仙花に取つてはそれが霜除けの材料になる。近頃は戦時で色々な物を新たに發明することを熱心にやる。今迄何にもならぬと思つて居つた物の中から尊い物がどん／＼出来て行く。かうなつて來ると弘法大師の眼識の偉いと云ふことが解る。「醫王の眼には途にふれて皆樂なり」、立派な醫者が見たら路傍にある草が皆樂である。總ての物はその使ひ途さへ知つて居れば一つとして役に立たぬ物はない。かういふのが大師の包容主義の思想であります。

それから又大師のお名前から考へてもさうです。大師は御出家前には無空といふ名前を附けて居られた。御年二十歳の時に横尾山で得道なされた時にはお師匠さんが附けた名前が教海といふ。更にお大師様が御自身で如空と改めて居られる。その後には又た空海と名を變へて居られる。三年も経たぬ間にこれだけ度々名前を變へられた。それは何で分るかといふと、大師が奈良の東大寺で具足戒を受けたのが二十二歳の時です。その時

の戒牒には空海となつて居る。さうすると二十歳で出家して二十二歳の時に空海となつて居るから三年間に四遍も名前が變つて居る。これは大師の御名が其思想に一致しなかつたから度々改名なされたのだと思ふ。包容主義の思想を持つた大師のお名前が無空では工合が悪い。教海でもいかぬ。如空でも満足は出来ぬ。天空海濶の四字を約めた空海、世の中に於て大空と大海とが一番廣い。大師の御思想が天空海濶である。天空海濶だから無空でもいかぬ。教海でもいかぬ如空でもいかぬ。どうしても空海でなければならぬ。そこでこの空海といふ名前が御氣に入つたから最後迄空海で通された。これから考へても弘法大師の思想といふものは非常な廣い思想であつたといふことが分る。この包容主義といふことは總ての物を活すといふことです。唯何も彼も抱き込むといふばかりではない。何も彼も抱き込んでしまつてそれを夫々の置場所に置いて夫々の働きをさして行くといふことであるから、總ての物を活して行くといふ思想である。總ての物を活して行くといふことが出来るのは何かといふと、萬有皆夫々存在の意義を持つて居

る。この萬有存在の意義といふものが解つたならば皆物を活して行くことが出来る。昔から眞言宗にかういふ専門語があります。「各々守自性、各々自建立」、これはなか／＼面白い言葉です。「各々守自性」といふのは、天地萬物は各々皆他の物が眞似の出来ない特色を持つて居るといふことです。その特色を持つてゐるから存在する意義がある。特色を持つて居るからこれも皆獨立した絶對の價値を持つて居る。かういふ意味です。

この事に付て私が感じましたのは、昭和十年に伊豫の松山へ盲腸炎再發豫防の灸點ををろしに行つた事がある。その歸りに小松驛で青年が五六人私の乗つて居る汽車に乗り込んで來た。その中で一番年のいつた洋服を着た人がポケットからバットを出したが燐寸を持つて居らぬ。そこで一緒に乗つた青年達に尋ねたが誰も燐寸を持つて居る者がない。その時その汽車の中で煙草を吸うて居る人もない。煙草喫みが煙草を吸ひたい時に燐寸がないのはつらいものです。これは煙草を吸ふ人でなければその心持が解らぬ。私

は煙草を吸ふので、その様子を見て氣の毒に思つて、その人は私と大分離れた所に坐つて居つたが、其處迄わざ／＼立つて行つて「燐寸をお使ひなさい」、その人は帽子を脱いで「有難うございます」、さうして今度は向ふが又私の坐つて居る所へその燐寸を返しに來て「有難うございました」とお辭儀をした。その時に私は考へた。あの大きな男が一本の燐寸の爲に頭を二遍下げた。かういふ所に宗教の本當の味ひを味ふ機會がある。燐寸一本であの大きな男は頭を二遍下げた。燐寸の尊さはこれでよく知られる。あの男でも懷ろに五圓札や十圓札は持つて居るであらうが、五圓札でも十圓札でも煙草に火は點かぬ。さうすると煙草を喫む時の一本の燐寸は十圓札よりも百圓札よりも尊い價値を持つて居る。それが萬有存在の意義である。「各々守自性」はそれである。そこに一本の燐寸が絶對の値打を持つて居るといふことになる。使ふべき場所へ持つて行つて使つたら總ての物は皆絶對の値打を持つて居るといふことになる。

お大師様が總ての物を捨てないのは此の萬有存在の意義を能く知つて居られたからで

あります。それをもう一つ理窟を押し詰めて宗教的にいふと、眞言宗の教からいへば、天地萬物は大日の現れたものである。日本の國の道からいへば神の現れたものである。佛の現れたものであり、神の現れたものであるとすれば、一枚の紙でも一本の燐寸でも紙そのものが佛様であり、燐寸そのものが神様である。我々人間の生活に必要なだから神や佛が種々様々な形を以て現はれたのが萬物だと達觀したならば總ての物を拜む心持が起つて来る。そこ迄行つたらもうこれが本當の宗教です。總ての物を拜む。それは人間同士拜むばかりでない。御飯を食べる時には御飯を拜む。紙を使ふ時には紙を拜む。總ての物を拜む。その心持、それは神であり佛である。天地萬物は人間の生活に必要な物であるから神や佛がさういふ風に現れてござるのである。だから必要な所へは物を惜しまずに出さなければならぬが、無駄な事には燐寸一本と雖も使つてはならない。これが節儉を勧める指導原理でなければならぬと思ふ。我々が人に儉約を勧める。その儉約の勧め方が人によるとかういふことを言ふ人がある。儉約したら得が行くから儉約をせよ

と言ふ。それは私は間違だと思ふ。さういふ意味の節儉を勧めるといふことは我々眞言宗の者は絶対に避けなければならぬ。我々が人に向つて儉約を勧める指導原理は、總ての物を活かし總ての物を拜むと云ふ思想でなければならぬ。勿論儉約したならば得が行くには違ひないが、それは儉約から来る自然の結果であつて、初めから得を目的に儉約するといふことは間違である。損得の思想から儉約すると根本が間違つて居るから更に間違つたものが二つ出て来る。一つは出しさへしなければよいといふ思想即ち節儉と吝嗇とを混同する。損得からやると出したら損が行く。そこで口と財布は閉づるに利ありといふやうなことで、ごんな事があつても金を出さぬ。財布の口をさう年が年中閉ぢては困る。時々は口を開けて貰はなければ困る。若し我々が出しさへしなければよいといふやうな思想になつたら國家も潰れてしまひます。眞言宗も潰れてしまひます。身分相應に金を出して國家を盛ならしめ、宗旨を立て、行くのが人間の尊ふといふ義務責任であります。「君子は財を惜しむ之を用ゆるに道あればなり」これが眞正な節儉であります。

それからもう一つは損得の思想で儉約する人は我が物は大事にするけれども人の物は粗末にする。世の中にはこの不道徳な人が随分あるのです。自分の金を出して買ふた酒ならば一合の酒でも大事さうにチビリ／＼飲んで居るが、他人の買ふた酒は一升の酒でも知らぬ顔をして飲んで居る。或は下女や下男が主人の物を粗末にする。これは主人の物だから粗末にしても自分の懐ろに損が行かぬと思ふて居るからです。斯る不道徳な行をするのは損得から節儉をするのだと思ふ誤つた思想から起つて來るのであるから、此誤つた思想を改めさせ、總ての物を活かし總ての物を拜む心から物を大切にするように教え導いて行かねばならぬ。

近頃盛んに勸めて居る報國貯金は使ひ途が決つて居るから間違も起らぬが、普通一般の貯蓄には損得思想の人が多いうように思ふから、教化の任に當る者は能く注意せねばならぬと思ひます。

二、現世主義

その次が現世主義といふこと。これにはこの世とこの身との二つの意味があります。即ち現世と現身とであります。大體眞言宗の教といふものは大師様がお書きになつた御文書などを拜見致しましても非常に形を重んずる宗旨でありまして、これが又眞言宗の一つの特色です。人によると信仰といふものは精神的なものだと言ふて、單に心の上ばかりの信仰を論ずる人があるけれども、眞言宗に於ては心と身と口との三方面の信仰を説くのである。即ち目に見えるこの世界に於て、目に見えるこの肉體の上に佛の徳を實現するのが目的でありますから大師が成佛を論じても即心成佛と云はずして即身成佛とお説きなされてある。それで眞言宗はこの世を大切にせよ。この身を大切にせよといふ。そんなら此世と此身の現狀に満足するの云へば決してそうではない。この世の現狀に満足し、この身の現狀に満足するものならば宗教の必要はない。満足しないから

宗教が要るのだ。併しこの世に満足せぬ、この身に満足せぬけれども、この世を捨てるとか、この身を捨てるとか、さういふ現世を否定するといふことを絶対にやらないといふのが真言宗の教である。満足はしないが決して捨てない。何處迄もこの世界を改良して、之を極樂淨土に近附けて行かう。自分の現在には決して満足しないが、これを改良してこの身を佛様に近附けて行かうと、かういふ所に真言宗の教がある。宗旨によるとこの世は假の世だといふ。弘法大師からいふと何で假の世であるか、眞理によつて現れた世界である。弘法大師は「乾坤は經籍の箱なり」と仰せられて居る。さうすると我々人間をはじめとして天地萬物は皆生きたお經文であり眞理を説いて居る。皆生きたお經文であり眞理を説いて居るといふことになる。假の物といふものはない。人間は五十年か七十年で死ぬるから電光朝露の如くはかない假りの身だと云ふ人があるけれども、これが人間の眞實の姿である。朝顔は朝咲いて晩に凋むからはないと思ふのは人間の勝手な觀察で朝咲いて晩に凋むのが本當の朝顔である。若しも朝顔の花が二ヶ月も三ヶ月も咲いて居つたら朝顔でない。朝咲いて晩に凋む所に朝顔の眞實の價值がある。それが眞理の現れである。真言宗で「この世で此身この儘で佛に成る」といつたら、他の宗旨の者は此世は障りが多いから現世では佛になれぬと云ふけれども、それは考へ方が誤つて居るので、障りの多い世界なればこそ信心する心が起るのである。更に一歩進んで考へたならば吾々が障りと思ふて居ることは、實に障りではなくして信心を勧める良縁であります。又た「人間には煩惱罪障があるから佛に成れない」といふけれどもこれも大變考へ違ひをして居るのです。煩惱罪障があればこそ我々は佛に成れるのである。煩惱のない所に菩提はない。大體煩惱といふものと菩提といふものと何處迄も二つ別な對立したもののやうに考へるからさういふ誤解をするのである。一應は煩惱と菩提とは二つに現れて居るけれども、もう一遍これを見直し考へ直して見ると一つのものである。一つのものだから煩惱即菩提といふ理論が成り立つのであります。その煩惱の捨て方などは後に又お話申上げる機會もありませうが、かういふ譯であるから弘法大師が現世に

三六

於て現身に成佛する教を立てられたのであります。尤もこの現世主義といふものにも色々なものがありまして、中には人間といふものは死んだらそれ切りだから生きて居る間に綺麗な着物を着、甘い物を食べ、したいだけの事をしたらよい。死んでからどうのかうのそんなことを思ふのは無益なことだ云ふ享樂的な現世主義を持つて居る者もあり、又中には人間といふものは死んだらそれ切りだから、生きて居る間にうんと善い事をしなければならぬといふ。それはよいのだけれども、死んでそれ切り無くなるものだといふ所にその人の思想には間違がある。大師の現世主義は我々の生命は永久に不滅のものだから、その永久不滅の生命を自覺して而もその日々を眞面目に本眞劍に生活して行けといふ教である。死んだ人を未來の世界へ行つたといふのは他人から見ても云ふことで、死んで行く本人からいふたら地獄へ行つても極樂へ行つても皆それが現世です。今日から云へば明日と云ふものがあるけれども、其明日が來たならば最早や明日ではなく今日である。明日と云ふものは永遠にあるもので而かも永遠に逢ふことの出來ぬ

ものでありますから、お互が現實に生活するのは永遠に今日のみであります。だから人間は今日一日を眞面目に努めなければなりません。弘法大師の現世主義は五十年、七十年の短い現世主義でなしに永久の現世主義です。眞言宗に用ゆる常樂會の和讃に

過去は過去とてさて過ぎぬ　未來は未來遙かなり

現在勵むことなくば　生死の出期なかるべし

と述べてありますが、此の現世主義といふものを愈々一日に切り詰めたのがいろは歌です。あのいろは歌は大師様の現世主義の現れた一つの尊い教だといふことに氣の附いて居る人は少い。「うゐのおくやまけふこえて」といふ。明日こえてでない。今日こえてである。今日一日を大切に勤めなければならぬ。千年も萬年も今日一日が積み重なつて出來るのだから、我々が今日一日さへ大切にして行けば千年でも萬年でも行ける。我々が何か辛い事。苦しい事を辛抱するのでもさうです。今日一日だと思つて辛抱すると辛抱が出來る。これから十年もこんな辛抱をしなければならぬかと思つたらうんざりす

る。兎に角眞言宗はさういふ風に現世主義、現世を大切にして行かうといふ主義です。それだからかういふ躍進日本の國民に最もよく適合して居る宗教だと思ひますが、末代の弟子たる我々の働きが足らぬから眞言宗が思ひ切つて腕を揮ふことの出来ないといふことは非常に遺憾である。御互に一つしつかり馬力を掛けてやらなければならぬと思ひます。

ホ、積極主義

その次は積極主義、これも亦眞言宗の一つの特色です。大體眞言宗の教といふものは二つの意味を持つて居る。一つは自己充實、一つは全體奉仕、自己を充實して全體の爲に奉仕するといふのが眞言宗の教です。近頃は滅私奉公といふことをよくいひますが、佛教で説く所の無我の大我と其意味が共通して居ると思ひます。眞言宗に於て自己の充實を説くのは全體に奉仕するための準備であるから、結局大我の思想であります。此大

我の思想を現實問題の上に實現實行して行くに就ては、其時と所とにより又は其職務や身分や地位や力量などによりて、いろいろの行き方があると思ひます。これを譬へていふと、こゝに鉢に水を一杯入れて、その中にコップを入れて、そのコップにも水が一杯入れてある。鉢を全體とすればコップが自分である。鉢に入れた水とコップに入れた水とは全く縁が切れて居る。そこでどうしてもこのコップの水と鉢の水とを一つにして行かなければならぬ。一つにして行くのにどうするかといふと、このコップを砕いてしまつて鉢の水とコップの水とを一つにするといふのが一つの行き方、滅私奉公はそれです。己といふものを無いものにしてしまつて全く全體といふものになりきつてしまふ。又たコップを段々大きくして鉢程の大きさのものにするといふことも全體と一致する所の一つの行き方であります。小我を養成して大我とすると云ふのはこれです。今一つはコップに穴をあける。さうするとコップは大きくはならぬけれども、穴からコップの水と鉢の水とが一つの物になつて来る。即ち力相應に全體のために盡す。これも一つの行

き方です。此の如く其行き方はいろ／＼ありまして、約まる所は全體のために盡すのが目的であるから、お互に現在の職務、地位、身分、力量等に應じて其行き方を考へ、出來得る限り全體のために最善の努力をせねばなりません。それには先づ自分を充實しなければならぬ。自己を充實して全體の爲に盡す。この自己を充實するといふことは眞言宗でいふ向上の菩提心の行である。即ち勝義の菩提心の活動である。全體の爲に盡すといふことが向下の菩提心の行である。即ち行願の菩提心の活動である。電車や汽車には終點があるけれども、菩提の行には終點はない何時迄も永久に前進せねばならぬ。

他の宗派では自己を充實して後に全體の爲に盡せと云ふのであるが、眞言宗では二轉同時とお大師様が仰しやつて居る。向上と向下とを同時に行ふのである。向上で「いは」の「い」の字を一字覺えたら、向下で人の爲にそれを教へる。向上で自分に金が十圓出來たら、向下で力相應に世の爲に盡して行く。順々に二轉同時に進んで行く。學校の先生にならうといふ目的で師範學校に入つたならば、師範學校を卒業してから人に教

へるといふのが他の宗の行き方。初めから隣の子供に教へてやれといふのが眞言宗の行き方です。大我の思想と云ふものは小さい所の我を養成して大きな我にして行けといふことです。小さい我は凡夫であるが大きな我は佛である。昔から病を養ふといふ面白い文句がある。養生といつたら誰にでも解るが、「養病」といふと一寸解りかねる。病は人間の敵だとすると、敵を養ふといふことはどういふ譯か、敵ならば追出してしまつたらよい。養はないでもよいぢやないかといふことになつて来る。それにも拘らず病を養ふといふ文句がある。これは病は人間の敵ではないと解釋した思想から來て居るので面白い考へ方だと思ふ。普通の考からいつたら健康と病氣と二つあるが、健康の人間は幸福であり病氣の人間は不幸である。さうすると一應の考へ方としては病氣は人間の敵であるといふ風に考へられる。それをもう一遍考へ直して見ると病は人間の味方であるといふことが解る。人間の體は過度の労働すると熱が出ます。それは疲勞の熱だといふ。成る程疲勞の熱に違ひない。併しそれを疲勞の熱と考へるのは一應の考へ方である。過

度の労働をした爲に熱が出て來るといふことは休めといふ一つの警告である。私は去る五月の初めに胃腸病に罹つて大きに閉口した。今に十分治らないのですが、その胃腸病の例で私はつくづく考へる。この胃腸病に罹つたといふことは健康を保つための警告です。食物を食べ過ぎたり、お菓子を食べて過ぎたりする。さうすると胸がやける。胸がやけるのは氣を付けよ、お前はお菓子を食べて過ぎるぞといふ警告です。その警告を構はずに饅頭を食ひ過ぎたり、鮭を食ひ過ぎたりする。手ぬるい警告ではどうしても反省もせず慎しまないから今度は胃腸病といふものを以て手厳しい制裁を加へて養生させることになる。胃腸が悪くなつたといふことは一應の考では自分を苦しめたことになるが、これをやらなければ本人が養生をしないから一つ荒療治にかういふ病といふものを起して體を大切にせよといふことを教へて呉れたのだと、考へると病は敵ではありません。味方です。さうするとその病を追出すといふことが出來ないから病を養うて行かなければならぬ。腫物が出來た時に其處の部分に熱が出て化膿する。お醫者さんに聞いて

見ると、あれは白血球が微菌と闘つて死んだ死骸ださうです。我々の身體を保護するために一命を捨てた戦死者です。追弔會を勤めて感謝せねばならぬ。かういふ事を考へて見ると病といふものを頭から人間の敵だと思つて見る見方は一應の見方である。それを見直し考へ直して見ると、病は人間の健康を保つ爲の一つの薬である。かう考へたら病を得て喜ぶといふ心も起つて來る。よく考へて見るとこの世の中の事は何事にも深い眞理と尊ぶといふ價值のあるものです。佛になるといつても持つて居る煩惱を捨てるのでない。小さい煩惱を養うて大きくするのであると云ふのが眞言宗の教です。小さい煩惱は罪惡であるけれども大きな煩惱は菩提であります。そこに大慾大貪の教といふものが現れて來る。詰り三毒の煩惱を養うて大きくせよといふのです。もう一つ言葉を換へて言ふたら本能の欲望の向き方を變へよといふことです。我々の本能といふものは小さい自己を目的として働くから罪惡となるのであるが、此本能の方向轉換をして社會國家のために働かせたならば佛の働きとなつて來ると云ふのが眞言宗の教であります。現在の日本の國

家の状態から考へて見て我々はかういふ教を盛に國民に向つて説かなければならぬと存じます。

以上申上げた包容主義と現世主義と積極主義、これが現實の問題を取扱つて行く上の指導原理でありますから、お互自らも之に依りて總ての物柄と事柄とを取扱ふて行かねばならず、又檀信徒にも之を説き示さねばなりません。

へ、實修實行の力

その次は實修實行の力、これは極く簡單に申上げたらい、ですが、包容主義、現世主義、積極主義、この三つの主義を指導原理として現實の世界の上に眞言宗の教義を實行して行かうと、いふのに付きましては自分の持つて居る總ての力を盡して行かなければならぬが、それと同時に佛の力を頼んで、自己の力と佛の力を合せたもので、事に當つて行くといふことが眞言宗の教です。又大師がさういふ風に爲されてござるのであり

ます。それでもありますから在家のお方にも一つそれを勧めて行かなければならぬと思ひます。今度の事變に付きましても武運長久の祈禱といふものが到る所に盛に行はれて居る。これは非常に善い事ではありますが、この武運長久の祈禱に付て、眞言宗の祈禱法から申しますと、我々専門家によつて専門的に御祈禱するといふことは必要であります。併し又かういふやうな時代には大衆と共に祈ることが最も必要であります。今度の事變に付きましても到る所で般若心經を讀んだり、或は不動さんの御眞言を唱へたりして大衆と共に御祈禱して居る。さういふ所へ行つて聽いて見ると大衆一般に喜んで勤めて居る。この大衆と共に祈るといふ行き方を益々盛にして行く必要があると思ひます。それから又た武運長久を祈る御祈禱も必要であることは申す迄もないが、銃後の國民が自分自らの務を盡して行く上に祈りつ、働くこと云ふことも必要なのであります。然るに之を實行して居る人が少ないように思はれるので、此事を充分一般の人々に説いて戴きたいと思ひます。大師一代の御傳記を拜見致しますと、大師は總ての事をなさるのに、

祈りつ、働いて居られる。一二の實例を擧げて見ますると、大師が學問を爲さるには虚空藏菩薩の言言を唱へつ、學問を爲された。だから大師の學問は書物と先生とさへあれば出来るといふ學問でない。無論書物も要り先生も要るが、更にそれ以上に虚空藏菩薩であるとか文珠菩薩であるとかいふやうな知識の方面の佛を拜んで、佛の靈の力といふものと自分の努力勉勵の力といふものと相俟つて學問をして行かうと、いふのが大師の行き方であります。讃岐の満濃の池を築造せられるに就きましても、普通の者がやつたら土木事業だからいきなり石を運んだり土俵を作つたりするのであるが、大師はさういふ事を爲さらずに先づ第一に大きな岩の上に不動様をお祀りして、其處で護摩を焚いて、御祈禱をなされ、それから池の工事に取り掛つて居られる。大師御自身が不動明王の眞言を唱へつ、池を掘る指圖を爲された。さういふ風に大師は何事を爲さるにも祈りつ、働き、働きつ、祈る。これが大師の主義です。私共が不束ながらかういふお話を皆様に申上げるのでも、唯私自分の力だけでなしに大師のお力を頼み、自分の寺の本尊觀

世音菩薩のお力を頼んで、話が工合好く出来ますやうに、宗旨の教に背かぬやうな話が出来ますやうにといふことを祈りつ、話を致して居ります。それですからこれはどうしても一般の眞言宗の檀信徒の方にこの意味を説いて聴かす必要があると思つてこゝに一項として擧げたのであります。これは極く簡単な事でありませんが併し非常に肝要な事でありますからこれだけ一言申上げておく次第であります。

三、別 論

イ、皇室と眞言宗

吾が眞言宗は開宗以來千有餘年間畏多くも歴代皇室の御叡信を辱くし、最も光榮ある歴史を有する宗教であることは、前章に於て概括的に一言申し上げて置きましたが此章に於ては今少し詳細に其尊ぶとき御事實を述べて、皆様と共に優渥なる皇室の御恩を拜謝し奉り益々忠君愛國の誠心を養成し、以て聖恩の萬一に報ひ奉りたいと存じます。

平城天皇と嵯峨天皇は大師から灌頂をお受けなされて御坐る。この平城天皇の御灌頂

に付きましては大師が「平城天皇灌頂文」といふ長い御文章をお書きになつて居る。あれを拜見致しますと、大師が支那の國で惠果和尚から眞言秘密の法をお授かりになつた時に惠果和尚が、早く日本の國へ歸つてこの眞言秘密の法を國家に奉つて國民の侍せを増せと仰しやつて居ります。そこで大師は支那に二十年間居られる積りが足掛三年で切り上げて大同元年に御歸朝なされ、傳へて來た眞言秘密の法門を平城天皇に奉つた。夫より十七年目の弘仁十三年に平城上皇は大師より灌頂を御受けなされ、翌十四年には嵯峨天皇が同じく灌頂を御受けなされた。御叡信の深きこと實に恐懼感激の至りであります。大師も十七年間の誠忠が實現して万乘の至尊に對し奉り灌頂を御授け申上げたことが、此上もなく喜ばしく且つ畏れ多いことであるご痛感なされたものと見え、平城天皇灌頂文に

大同元年を以て曼荼羅並に經等を獻じ奉る爾より已還愚忠感なく忽に一十七年を経たり天、人の欲に従ひ聖、人の心を察みたまふ因縁感應の故に今日龍顏に對し奉りて愚誠を遂ぐることを得たり一たびは喜び一たびは懼れて心神厝をきごころなし

ご御述べなされてあります。

それから又た宇多天皇が仁和寺の御開祖であらせられ、後宇多天皇が大覺寺の御中興をなされたことは皆様の御承知の通りであります。東寺が桓武天皇御建立の官寺であつたのを弘仁十四年嵯峨天皇から大師に賜はつた鎮護國家の道場であることも御承知の通りであります。又大師が平城、嵯峨、淳和、仁明の四代の天皇にお仕へ申上げ、其間に國家の爲に五十一度の祈禱をなされたといふことは後宇多法皇御宸筆の大師傳に御述べなされてあります。高野山に致しましても、高野山に御臨幸なし給ひし至尊が御十方ある。寛平法皇、白河天皇、鳥羽天皇、後鳥羽上皇、後嵯峨上皇、後宇多法皇、後醍醐天皇、光嚴天皇、この御十方の至尊があつた三里の高い山の奥迄御足を運んで御臨幸遊ばされたといふことは實に容易ならぬ事であると存じます。考へて見ると眞言宗としてこれ程の光榮なことはないと思ひます。それから又大覺寺の勅封心經に致しましても、この勅封心經のことは在家の方は御承知ないですが、十分説いて戴きたいと思ひます。

勅封心經は嵯峨天皇、後光嚴院天皇、後花園天皇、後奈良天皇、正親町天皇、光格天皇の六帝御宸筆の般若心經で、眞言宗に於ける最尊無上の法寶であります。それから又皇族方が眞言宗で御出家なされたお方のことは石堂大僧正のお書きになつた「皇室と眞言宗」の中に委しく出て居りますから御一讀を希望致します。尙又京都の太秦の廣隆寺は、歴代の天皇が御即位式をお舉げ遊ばす度毎に同寺の聖徳太子の尊像に御即位式に陛下がお召し遊ばしたき同じやうな御装束を賜はる。今召して居るのは今上陛下から賜はつた御装束で、御冠、黄櫨染御袍、小葵御下襲、小菱御單、窠霞御表袴、御石帶、御笏、御草鞋の八品であります。御承知の通り廣隆寺は聖徳太子が御建立なされた七大寺の一つで、此寺にお祀りしてある聖徳太子は三十三歳の等身の像です。それが陛下から賜はつたこれだけの御品を御體に付けてござるのです。洵に尊い事であると思ひます。かういふ尊いお寺が眞言宗にあるといふことは我々として光榮の至りであります。泉涌寺が四條天皇以來皇室の御聖牌を御祭りする御寺であり、東寺は毎年御修法を奉修して居

る御寺であります。此の如く過去の歴史からいつても、現在の事實からいつても皇室と深き御因縁がありますのは實に難有いことでもあります。又近頃になりましたは高野山に昭和九年大師の御遠忌を勤めました時には畏多くも陛下から大師の御衣を賜はり、又その後にも大塔の勅額を賜はり、而もその勅額は眞言宗と最も御縁故の深い閑院宮殿下がお書き遊ばされたのであると拜承いたします。かういふ風に過去の歴史を考へ又現在の事實を拜見致しますと、お互眞言宗の者はこの國に生れて皇室と斯かる有難い御因縁を結ばせて戴いて居るのであるから、眞言宗の法流を汲む者は心から之を喜び、優渥なる歴代皇室の御恩に對して感謝の誠を捧げ奉らねばなりません。そうして此事實を一般の檀信徒に説き示して盡忠報國の誠を盡さしめるように教え導かねばならぬ。

ロ、日本帝國と眞言宗

京都嵯峨の大覺寺を中興なされた後宇多法皇の御遺詔が國寶となつて今に同寺にあり

ますが、之を拜見致しますと其第三條に

夫れ以みれば我大日本國は法爾の稱號にして秘教と相應せる法身の土なり

と御述べなされてあります。私は此御遺詔を拜讀して實に恐懼感激に堪へんのである。眞言宗の僧侶と信者とは日本帝國と眞言密教との相應して居る點を能く領解し、其教義信仰を根本精神として盡忠報國の誠を盡し、以て法皇の御思召に契ふように努力せねばなりません。

日本帝國と眞言密教との相應して居る點が大體に於て五つあると思ひます。先づ第一番が日本の國の成り立ちです。和田大圓僧正が講義を爲さる時によく神縁起といふことを言はれましたが、日本の國は神縁起の國である。日本書紀の神代の卷や古事記の神代の卷を拜見すると、日本の國の出來方が書いてある。それに依ると日本の國は最初に國常立尊が現はれ給ひ、夫から神様が次々に現れて出來たものである。土地も草も木も月も星も總ての物が悉く神が現れたものであるといふのが日本の國の出來方であります。

それだから神縁起と申してよいのであります。眞言宗の教から申しますと、大日如來の現れたものが即ち天地万物であると云ふ。眞言宗ではよく六大縁起といつて地、水、火、風、空、識の六大の現れたものが天地万物であるといふ。六大縁起といふのに法に就て説くから、さういふが、人に就て言ふたならば大日如來の現れた姿であるから大日縁起である。この世界を密嚴國土と名けるのは即ち大日の身と口と意との三密によりて莊嚴せる所であるから密嚴國土といふ。即身義の中に大師は、法身の三密はどんな廣いものの中に這入つても廣過ぎて困るといふことはない。どんな狭いものの中に這入つても狭過ぎて困るといふことはない。如何なる大きいものにも如何なる小さいものにも皆悉く法身大日如來の三密が完全に具はつて居ると御説きなされてある。切り詰めていつたら、天地万物は其儘大日如來の現れた姿であるといふのが眞言宗の教である。さうすると日本固有の神縁起の説と眞言宗の大日縁起の説とを並べて考へて見ると、其直覺的信仰の世界観がまことに能く相應して居ると思ひます。

それから天照太神中心の神観と大日如來中心の佛身観であります。天照太神は伊弉諾、伊弉册の二尊が大八洲を生み、山川草木を生みて日本の國土が出来たから、此國を統治する君を生ねばならぬとの御思召から産み給ふた神様であらせられることは皆様の御承知の通りであります。天照太神は其神徳廣大にして光明赫々と輝やく神様であらせられたから、日本書紀には「此子光華明彩しくして六合の内このみこひかりうらはに照徹せり」とあります。それで天照太神は日の神とも申上げ、大日靈貴尊おほひるめむすのみのみこととも申上げる。日本國民は傳統的の信仰として太陽を通して天照太神を拜むといふ一つの信仰を持つて居るのは深い理由のあることであると存じます。日本の國の神様が幾柱ましますか知りませんが、天照太神を中心として八百萬の神が日本の國を御護りなされ我々國民を御護り下されて居るといふことが日本國民の傳統的の信仰であります。眞言宗では大日如來を中心として三世十方の佛が衆生濟度の爲に御活動なされてござると云ふのであるから天照太神中心の神観といふものと大日中心の佛身観といふものが洵によく相應して居ると思ひます。

す。

それから國家の理想と眞言宗の理想であります。日本の國は何を理想として居るか、私は日本の一番根本の神様であらせられる天照太神の御靈徳を太陽によつて現はして居る所から考察致しまして、太陽が光明赫々として世界万国を照すように、天照太神の御靈徳を世界中に輝かし世界の平和を維持し人類の幸福を増進するのが日本の國の理想であると存じます。眞言宗の理想は何かといふと、この地上に、この我々の體の上に、我々の働きの上に大日の徳を現はして行かうといふ事が眞言宗の理想である。そこで日本の國家の理想といふものと眞言宗の理想といふものとがまことに能く相應して居ると存じます。殊に日本の神様の方は大日靈貴尊おほひるめむすのみのみことと名け奉り、眞言宗の佛様の方は大日如來と稱し奉り、神號と佛名とが共に太陽によつて御靈徳を現はしてあるのは實に尊ぶといふことでもあります。

それからもう一つは、神の御心を二つに分けて一を和魂と稱し一を荒魂と名け奉る。

和魂は平和の御精神で荒魂は武勇の御精神であります。今度の支那事變に就ては荒魂の方が發動して居る。日本は誠心誠意和魂の平和なる精神で支那と交渉したが國民政府が頑迷不靈でどうしても日本の誠意を認めず、他く迄侮日排日抗日の不法行爲を仕向けて來るから、止むを得ず荒魂の精神を發動して慈悲の拳骨を振り上げて居るのである。我が眞言宗に於て佛の慈悲を説く時に攝取門の慈悲と折伏門の慈悲との二つに分ける。攝取門の慈悲は優しい慈悲であり、折伏門の慈悲は荒々しい慈悲である。觀音様やお地藏様の慈悲は攝取門の優しい慈悲であり、不動明王や大元帥明王の慈悲は折伏門の荒々しい慈悲である。眞言宗の教理からいつたら支那事變に對する日本の行動は折伏門の慈悲を實行して居るのである。言葉を換へて言ふたら、不動明王、大元帥明王の活動を我々がやつて居るのである。かういふ風に考へて見ると神の御心が和魂と荒魂との二た通りに御働きなされるのと、佛の御心が攝取と折伏の兩方に御働きなされるのが、其意味洵に能く相應して居ると存じます。眞言宗の者が支那事變の話をする時には此根本精神

から説いて行かねばならぬ。

更にもう一つ申しましたならば、日本の國でいふ忠の道と眞言宗でいふ佛の道とであります。日本の忠は道の全體で親子の道も夫婦の道も兄弟の道も其他の教育、宗教、政治、産業等の總てが皆忠の中に含んで居るのである。つまり天壤無窮の皇運を扶翼し奉る道ならば總てのものが皆忠であるといふのが日本の教です。それですから忠は孝行と對立した忠ではない。孝行も忠義の中にある。日本の忠は國民道德の全體であるから絶対の道であります。眞言宗でいふ佛の道といふものは絶対の道であつて外の道と對立した道ではない。佛にならうと思ふ菩提心を起した以上は何を以て、も佛の道を行ふことが出来るのであります。人生百般の行爲が皆佛道となるのであります。即事而眞當相即道といふ専門語は此意味である。我々の日常生活の姿その儘が佛の道であると、かう心得て行くのが眞言宗の教の立て方であります。それでありますから眞言宗でいふ佛道といふものは他の道と對立した道ではなく絶対の道であります。何で、も佛の道は行は

れるのである。これが常相即道の意味であります。この常相即道といふことを我々が現實の問題の上で説いて行くことを常に心懸けなければならぬと思ひます。此の如く日本の絶待的忠道と眞言宗の絶待的佛道とが相應して居ると思ひます。

かういふやうな譯で日本の國の教と眞言宗の教義信仰といふものを比較して考へて見ると洵によく相應して居る。そこで後宇多法皇が御遺詔の第三條に、我が日本の國は眞言秘密の教によく相應して居る國であると仰せられたのであると伺ひ奉るのであります。私共は眞言宗の歴史を讀んでこの皇室との有難い御因縁を喜び、日本の國の道と眞言宗の教義との一致して居ることを喜ぶと同時に、自己の責任の非常に重大なることを痛感して居るのであります。御互にこの責任感を以て皇室の御ため國家のために至誠を盡して最善の御奉公を致し、以て法皇の御思召に契ふよう努力せねばなりません。

ハ、佛身論の特色

今度は佛身論の特色を一つ申し上げます。佛身のことについて我が眞言宗の特色は、大師が二教論に仰せられて居るやうに、法身大日如來が説法するかせぬか、言葉を換へて言ふと、法身佛は單なる冷やかな理體であるか、體と心と聲との三つ揃つた生きたお方であるか、この見方に付て眞言宗の特色といふものはこゝだといふことを大師がお書きになつて居ります。本當の佛身論の特色をお話するにはあれから説かなければならぬのであるが、あれは大分むづかしい議論であつて一般在家のお方にお話申すに付ては大分話しにくいし、又これは直接必要な場合も少からうかと存じましたので法身佛のことは省略してあります。これは皆様が二教論を御覽下さつて、もし在家の方からさういふ事を聽かれて説いて聽かさなければならぬ必要が生じた時には適當にお話を願つたらよいと思ひますので、今此所では在家の教化に直接必要のある項目だけを擧げて大體のお話を申し上げます。

先づ第一番に眞言宗で音聲佛といふことを認めるのが一つの特色です。聲の上の佛を

認める。我々が南無大師遍照金剛と唱へ、南無觀世音菩薩と唱へますが、その唱へた聲そのものが一體の佛であるといふのです。日本の國で聲といふことの研究をしたのは弘法大師が始まりであります。弘法大師以前にあれ程聲のことを深く研究したお方はございません。弘法大師以後にもありません。大師の教から申しますと、聲といふものには眞理があるといふのです。私は聲に眞理があると思ひます。大師が仰しやつたあのむつかしい根本の理窟を述べなくとも、普通我々が常識的に考へましても、我々の同じ咽喉から出て來る所の聲でも、腹を立てた時の聲と泣く時の聲と笑ふ時の聲は皆違ふ。怒つた時の聲は三角な聲であり、泣く時の聲は細長い聲、笑ふ時の聲は丸味を帯びた聲といふ風に、聲を聴いてもその人の精神が分ります。眞言宗では聲の上の佛を認めるから、眞言念佛を唱へるといふことが唯單に信仰を練る一つの手段方法に唱へて居るのではないので、唱へる度毎に自分の口から一體の佛様を現はして居るのだといふのが眞言宗の眞言念佛を唱へる心持です。この意味が本當に解つて見ると南無大師遍照金剛でも

欠伸半分や居眠り半分に唱へてはならぬ。全く本眞劍に唱へなければならぬ。私のこの不淨な口から眞言念佛を唱へる度毎に一體の佛様が現れる。自分の眼に見えないけれども自分の唱へた聲の上の佛様が壇上にお祀りして居る佛様と一致して私共を救うて下さるといふ不思議な働きを現はす。かういふ深い意味を認めて唱へるのが眞言宗の唱へ方であります。唯精神統一の手段方法に唱へるといふのと大分譯が違ふ。これは眞言宗の一つの特色であると思ひます。

それから文字の上の佛を認める。御承知の通り文字といふものは聲を眼で見るとものに作れ換へたのが文字であります。聲は耳で聴くべきものであるが文字は眼で見るとすべきもの、その眼で見るやうに聲を作り換へた文字の上の佛を認める。所謂法曼荼羅といふものがそれです。法曼荼羅といふものは文字の上の佛を認めて行く。この意味が本當に解つて來ないとお守札の有難いといふことが解つて來ない。今度の事變で到る所の神社佛閣から軍人に武運長久のお守札を贈る。お守札は文字で書いたものである。文字そのもの

のの中に尊い佛の徳を認め神の徳を認めなかつたらお守札といふものは全く無意味なものです。お守札は本當に有難いものであるといふことの意味は眞言宗の教理から割出して來なければ決して出て來るものでない。唯安心、氣休めのものであつたらよいといふやうな譯のものでない。これは我々自らも一つお守札を取扱ふ上に於て注意しなければならぬが、在家の方に對してはこの事をよく話をする必要があると思ふのであります。

更に又た形の上、物質の上に佛を認めて行くといふ形像佛、即ち繪像、繪に描いた佛様、木像、木を刻んだ佛様、さういふ物質の上に佛を認めて行くといふ行き方です。この物質の上に色々な意味を持つて居るといふことは、お大師様が聲字義の中に三つに分けてまして、一つは顯色といふことを仰しやつて居る。顯色といふのは赤とか青とかの色です。色に眞理があるといふのが眞言宗の教です。一つは形色、即ち三角とか四角とかいふ形です。形に眞理がある。それから一つは表色、これは變化です。形のあるものの上に變化が起つて來る。かういふ風に顯色、形色、表色と大師がお説きになつて居りま

す。前にもちよつと申上げましたやうに大體眞言宗は形を重んずる宗旨であります。同じ佛様を祀るにしてもどういふ風に祀つておいてもよいといふ譯には行かぬのであります。そこで大日經を拜見するといふと、壇を拵へるのに土地を選ばなければならぬ。壇の築き方がある。或は佛具はかういふ風に飾る。或は御祈禱の種類によつて供へる品物迄がチャンと決つて居るといふやうな風で、總て物の形の上に眞理を認めて行くといふことが眞言宗の教です。だから寺でも唯大勢の人が這入つて佛様を拜んだり、又説教や講演が出來たらそれでいゝといふ譯に行かぬ。立派でなければならぬ。寺は尊い佛様を祀つて居る所だから、バラツク建や亞鉛張でもよいといふ譯に行かぬ。お堂の中の佛様を拜む前に先づ門を這入つたら自然に頭が下るといふやうに寺を莊嚴に綺麗にしておかなければならぬと思ひます。世の中に伽藍佛教でお堂ばかり幾ら立派にしても何にもならぬと言ふ人がありますが、それは人間といふものを知らぬ人の言ふことであります。教育でもさうです。學校はどんな建物でも構はぬと言ふのはそれは生徒の心理を

知らぬ人の言ふことです。生徒が學校の門を這入つたら、綺麗な學校だ。これが自分の行く學校だと、かう思ふことによつて生徒の精神を引き立てる。教育する所は教育するに適當なやうに建て、おかなければならぬ。講演するのでもさうです。福來友吉先生はよく言つて居りましたが、世の中には講演の心理が解らぬ人が多くて困る。周圍の様子が講演に適したやうに出來て居る所でなかつたら本當に理想的の講演といふものは出來るものでない。かう言つて居りましたが、それは本當です。これは實際講演した人でなければさういふ所が解らぬ。寺でも出來るだけ立派にしておかなければならぬ。さういふ風に形の眞理を認めて行く。形はごうでもい、といふやうな説は取るに足らぬ空論であります。この頃何かの會合の度毎に伊勢大廟及宮城に向つて遙拜を致しますが、さういふ時分でも我々は大廟を心に念じて體を本當の最敬禮の形に整へることによつて我々が誠心になつて天照大神を拜し、今上陛下を拜し奉る精神が起つて來る。又それを他の者が見てそれに感激する。だから形を整へることは精神の現れた姿として尊い

ことであるのみならず、その形を整へたことによりて精神が整ふものだといふ理窟からいうても尊ふとき意義のあることです。浴衣がけて臺所で胡坐あぐらをかいて居る時と紋附を着て座敷に坐つて居る時とは心持が違ふ。これは形を整へるといふことが精神に直接影響するといふことの一、番卑近な例でよく解ることです。弘法大師が形の眞理を説かれたのは實に卓見だと思ひます。

佛像の作り方に付ても日本の國では大師以前には一定の形がなかつた。このことは太秦の廣隆寺の寶物館を御覽になつたらよく分る。廣隆寺こうりゅうには弘法大師以前の佛像が澤山あります。朝鮮から渡つて來た佛像です。行つて拜んで見ると、これは彌勒さんだといふ札が附いて居るけれども、我々が見るとお地藏さんのやうに見える。これはお薬師さんだといふのが我々が見ると如意輪觀音さんのやうに見える。大師以前に朝鮮あたりで出來た佛像といふものは作り方に一定の規則がなかつたといふことがあれを見るとよく分る。それを大師が秘密儀軌によつて佛像の作り方といふものをチャンと一定された。

阿彌陀さんのお姿はかう、不動様はかう、観音様はかうといふ風に決めた。形も色も手の動かし方も所持物もチャンと一定の様式をお決めなされたのです。これ一つからいつでも我が弘法大師といふお方は日本佛教の藝術上實に重大な御恩のあるお方であると思ひます。かういふ點から考へて見ると眞言宗は形を重んずる宗教であるから形の佛様といふものに非常な深い眞理を認めて行く。それで佛壇に祀つてある繪像、木像を拜む時にも他の宗旨と大分拜む心持が違ふ。耶蘇教の人は佛教の人が佛像を祀るのは偶像崇拜だといふが、我々眞言宗の者からいつたら世の中に偶像といふものはない。天地万物皆生きて居るといふのが弘法大師の教です。我々の眼から見たら死んで居るやうに見えるけれども、それは我々の眼が届かぬだけのことで、實際は皆生きて居るものだ。天地万物は生命の現れた姿であるといふのが眞言宗の教です。山でも川でも木でも石でも皆生きて居る。それが死んだもののやうに見えるのは我々の眼が深い所迄届かないから死んで居るやうに見えるだけのことです。又人によりますと、佛像や佛畫といふもの

は眞實の佛様でない。けれども信心するのに何か目標がなければ精神を集注することが出来ぬ。何でも拜めといふやうな譯にも行かないから、弓や鐵砲の稽古に的を決めて置くやうに、信心をする上の拜む的として佛像や佛畫を祭るのだといふ人がある。佛像佛畫が假の目標であるとしたら眞實の佛は何處にござるのか、もし眞實の佛は宇宙に遍満して居るものであるといふのならば、佛像佛畫も宇宙の中の一部である。こゝ、だけには佛様がお留守だとは言はれぬではありませんか、もし佛様が極樂淨土ばかりにござつてお佛壇にお祀りしてある佛像佛畫とは全く關係の無いものだといふならば、如何にも融通の利かない佛様だ、ごうもさういふ融通の利かない佛様が我々を救うて呉れるようには思はれぬ。眞言宗の教理から言へば佛像佛畫の中に眞實の佛の徳を具へて居るのであるから、夫れが其儘眞實の佛であります。斯く申しますとお前が何ぼさう言つた所で、お前の眼でこの大師様の繪像が眞實のお大師様と見えぬだらう。わしが見ても見えぬと言ふ人があります。併しながらそれは佛像佛畫に眞實の大師の徳が具はつて居らぬため

か、又は自分の眼識がないためかを能く調べて見ねばならぬ。自分の手許をよく調べないで他の方のことばかり悪く言つて居るのが平凡な人の常である。佛像佛畫を眺めてこれが眞實のお大師様に見えないといふのはこつちの眼が悪いからである。大師様は「我が形像を見る毎に眞相の想に住せよ」と仰やつて居る。それには理窟がある、併し理窟を表に出したら理窟の解らない人は理窟を聴くのに日が暮れてしまふから、そこで大師様は理窟を隠して「本當のわしだと思つて拜め」と仰せられたのである。拜んだらそこに不思議の靈驗が現れて来る。これが眞言宗の繪像木像に對する教であります。

そこで眞言宗では藝術と宗教とは一つだといふことになる。藝術と宗教とは別々なんといふことは外の宗旨で考へることで、眞言宗からいつたら藝術と宗教とは一つだ。大體宗教藝術といふものはなんで起つて来るか、宗教藝術の起つて来る道筋といふものを考へて見ますると、眞實の神佛といふものは眼に見えない。たとへ神佛の存在を確信しても神佛が眼に見えないでは信仰心が満足しないから、何とかして神佛を眼に見えるや

うにして拜みたいといふ心が起る。それは丁度自分の息子は大阪に居るといふことは分つて居るけれども、自分の家で自分の心で子供のことを思つても満足しないが、寫眞でも見て子供のことを思ふと親の心が満足する。それと同じく我々が眼に見えぬ佛様を眼に見えるやうにして拜んで行かうといふ心が起つて来る。そこに佛像佛畫といふものが出来て来る。さうするとそれをお祀りするには立派なお堂が要るといふので建築が出来て来る。其の佛様の前で黙つて拜むのでは物足らぬから、何か口に唱へて拜むことになるから佛教文學といふものが出来て来る。唯唱へるだけでは満足出来ぬから音楽に合して唱へる。そこで宗教音楽といふものが出来て来る。それがもう一つ進んで来ると踊つたり舞つたりすることの舞踊といふものが出来て来るのであります。此様に宗教の信仰から藝術が生れて来るから、一般宗教としては宗教と藝術とは離る可からざる關係があると思しますが、眞言宗としては藝術宗即教と見るので、其考へ方が大分違つて居ります。元來藝術と云ふものは物質の上に人間の理想を現はすものであるから、物質の上

に宗教の意義を認める真言宗としては藝術即宗教となるのが自然の歸結であります。随つて佛像佛畫に對する考も他の宗派とは異なり、形像即眞佛と見るのであります。これが眞言宗教義の一つの特色であります。そこで佛像の手が折れたり所持物が落ちたりしたものがあれば早く修繕せねばならぬ。寺院建立の根本である所の佛像が傷んで居るのを其儘にして居るようなことでは寺が盛んになる道理はない。これは寺院にも在家にも注意せねばならぬことです。

次に等流法身、これが又眞言宗の一つの特色です。御承知の通り佛身の立て方に就ては一身、二身、三身、四身乃至十身といろ／＼ありますが、普通は三身説といふことになつて居ります。即ち法身佛、報身佛、應身佛、これが各宗に共通した普通の佛様の分類法であります。所が眞言宗では其外に等流法身といふものを立てる。等流とは等同流類といふことであります。これは救うてやらうといふ對手方の者と同じやうな姿になつて出て來るといふのです。博奕打ちを救はうと思へば博奕打ちの姿で現れて來る。大酒

飲みを救はうと思へば大酒飲みの姿で假に現れて來てその仲間へ這入つて自然々々のうちにそれを救うてやる。春朝と云ふ僧侶は監獄の罪人を濟度しようと思つてわざと泥棒をして監獄に入つたと云ふことであるが、播州加古川稱名寺の理觀上人も乞食を救ふ爲に乞食の仲間に入つてこれを救つたと聞いて居ります。これ等のお方は等流法身の佛と同じ活動をなされたお方であります。要するに等流法身の佛を説くのが眞言宗の佛身論の一つの特色であります。

その次には佛と祖師とを一つと見ることに即ち「大師即大日」と云ふことが眞言宗の特色であります。大師が大日であるといふことは即ち祖師と佛とを一つに見るといふ見方です。この地上に生れて來た人の中で弘法大師程大日如來の靈徳が完全に現れて居る御方はないと思ひます。そこで我々は大師を生きた大日として拜んで居るのであります。そこに大師の尊い所があり、我々がお縋り申すだけの値打がある。この祖師と佛様とを一つに見るといふ所に、眞言宗の一つの特色があると思ひます。

信仰の對象に就てお話申した序に申上げて置きたいことがある。世の中に佛は自分の心の中にあるものだ。心より外に佛様はないと云ふ人がある。相當立派な坊さんでさういふ事を言ふ人もある。これは怪しからぬ事であると思ひます。大師様のお書きになつた書物の中に我々の價値の尊さを教へる爲に「夫れ佛法遙かにあらず心中にして即ち近し」とか或は「法身他にあらず即ち是れ我が心身」とかいふお言葉が到る所にある。けれどもこれは我々の尊い價値を知れといふことを仰しやつたのであつて、それを理由にして自分以外に佛様がないといふのは大なる曲解である。もし自分以外に佛様がないといふのでは宗教にはならない。宗教といふものは信仰の客體と信仰の主體とを一致せしめるのが宗教である。信仰の客體を認めずして宗教が成り立つ理窟はない。心の中に佛性を持つて居るから別に佛を拜むには及ばぬと云ふのは言ひ易いし解り易いから輕卒にさういふ事を言ひますけれども、それでは宗教といふものにならない。それは本體論の上の一つの理窟です。幾ら本體論の理窟を言つても現實の自分は未だ佛性が完全に現は

れて居らぬ、最後には佛と自分が一つになるのではあるが、縦たしなつた所で自分より外に佛様がないとは言へない。今小學校の生徒が、わしも博士にならねばならないといつて勉強して終ひに博士になつたら博士と一致したといふことになる。さうなつても自分より外に博士がないといふことは言へない、自分より外に博士は澤山ある。大師が「法身他にあらず即ち我が心身」といふやうなことを仰せられたのは自分より外に佛はないぞといふことではない。人間の持つて居る尊い價値をよく知らなければならぬぞといふことを教えて下されたのである。然るにそれを曲解して自分より外に佛様はないものだといふやうな理窟ばかり言つてちつとも佛様を拜まぬ横着な人間が出て來ると云ふことは遺憾千萬なことです。殊に僧侶の中にさういふやうな唯心論の理窟ばかり言つて宗教の本當の尊い所といふものを叩き壞すやうなことを言ふ者があるといふことは實に怪しからぬ事であると思ひます。

二、生の宗教

七六

それからその次に生の宗教といふ問題であります。吾眞言宗は生の宗教である。その生の宗教であるといふことに付て先づ以て我々が知らなければならぬのは、御互をはじめとして天地万物は皆それ／＼生きる力といふものを持つて居る。この生きる力、生命の力といふものは非常に強いものである。路傍の草は通行人に踏まれて倒れて居るけれども、踏む足が少し緩むと直ぐ起き上つて伸びて来る。床の下に生えた竹は眞つ直ぐに伸びられないから横に伸びます。あ、いふ所を見たら生命の力といふものがどの位強いかといふことが分る。天地万物は皆この生きる力、生命の力を持つて居る。所が我々が如何に生きる力を持つて居りましても、もしこの世界に物を生かして行く力がなかつたら萬物は決して生きて行くことが出来るものでない。卑近な例であるが、空飛ぶ鳥は二枚の羽で飛ぶ飛ぶには違ひないが、もしこの世界に空氣がなかつたら鳥も飛ぶことは出

来ない。真空状態に於ては鳥は飛べぬ、魚が水の中で遊ぶといふのは鱗と尾とで遊ぶには違ひないが、もし水がなかつたらどうしても遊べない。鳥の方からいつたら飛ぶのであるけれども空氣の方からいつたら飛ばせてやるのである。魚の方からいつたら遊ぶのであるが水の方からいつたら遊ぶがせてやるのである。それと同じ理論で、我々は生きる力を持つて居るけれども、この大宇宙の根本に物を活す力がなかつたならば生きて行くことが出来ないのである。然らばこの宇宙根本の大生命の力は何であるかといふとそれが神であり佛である。眞言宗から申せば大日如来である。大師が「即身義」の中に引いてある大日經の五大の文の中の地大の句に「阿字第一命」と説いてある。阿字は大日如来の種子である。それが第一命、第一命といふことは根本の生命といふことである。即ち大日が宇宙根本の生命である。我々は大日の生命の流れを受けてこの世に生れて来て居る。そこで我々の持つて居る生きる力は大日から流れて来た小さい生命であり、宇宙根本の活かす力は大きな生命である。

七七

佛教では佛のお心を慈悲といふ「佛心とは大慈悲是なり」、大體慈悲とはごういふことかといふと、物を活して行く力である。だから我々も佛のこの慈悲の思召を體得して總ての物を活して行かなければならぬ。あの阿字觀の三綱領の中に「すべてのものを活かしませう」といふのがある。あの物を活して行く所の力は慈悲の働きである。基督教では神の御心は愛なりといふ。愛は物を活して行く力である。宇宙の根本の大生命は慈悲であり愛である。言葉を換へて言ふたら神であり佛である。我々は宇宙根本の大生命たる佛の懷ろの中から生れて來たのであり、さうして佛の慈悲の懷ろの中で生活して居るのである。それだから我々の日常生活といふものはその親である佛の御精神に一致するやうに進んで行かなければならぬ。言葉を換へて言ふと、生きる力を活す力に一致せしめなければならぬ。生きる力が活す力に一致して行く所が即ち宗教であります。「阿字の子が阿字のふるさと立出で、又立ち歸る阿字のふるさと。」の道歌は意味が深いと思ひます。

我々が大日の懷ろから生れて來て大日の懷ろの中で活動して居るのであるといふ。この信仰の立場から自分は毎日ごういふことをやつて居るかど我が身を振り返り見ると、ごうも親の心に一致しないやうなことが多い。これではならぬ、親に心配を掛けては洵に相濟まぬ、親の心に是非一致するやうにしなければならぬと、我が身を反省したならば自分を改善して行くことが出来る。さうすると信仰、反省、改善進歩となつて來ます。眞言宗が生宗教であると云ふことは信仰の對象たる佛を拜んで見れば能くわかる。藥壺を持つて病氣を癒す藥師如來、延命長壽を得させて下さる普賢延命菩薩、劍と索を持つて惡魔降伏をなさる不動明王、經卷を持つて知識を授けて下さる文殊菩薩、珠を持つて福德を與へて下さる地藏菩薩や虚空藏菩薩。是等の諸佛は宇宙根本の大生命たる大日如來が、我々人間の生活を幸福にして下さる慈悲心から現はれ出でた佛様であります、此佛様をお祭りしてある所から考へて見ても眞言宗は人間生活の妨害となる災難や苦痛を除き、人生に必要な福利を増進し、之を以て佛の道を行ふ所の資料とな

し、極樂の風光を地上に展開し、佛陀の靈徳を此身に實現せしむるを目的とする生の宗教であるといふ意味がよく解ると思ひます。それ故に今日のやうに生々發展して行く所の我が日本の國民を指導して行くのには最も適當せる尊ぶとき宗教であると確信致します。併し幾ら尊い教でも我々が唯それを持つて居るばかりで、之を活用しなければ寶の持腐らして何の役にも立ちません、御互に生の宗教の意味合を十分世の中に宣傳するよう努力せねばならぬと思ひます。

ホ、眞言宗の戒法

次には眞言宗の戒法のことですが、弘法大師は弘仁の御遺誡の中に

顯密の二戒を堅固に受持して犯すことなかれ

と仰せられてありますが、今日の眞言宗僧侶は顯教の戒法を完全に護持することは出来ません。けれども眞言宗の秘密の戒法だけではどうでもかうでも守らなければならぬ譯

であります。眞言宗の秘密の戒法といふものは何であるかといふと御承知の菩提心戒の一つであります。これが眞言宗の秘密の戒法であります。この菩提心のことに付きましては大日經の疏をお書きになつた善無畏三藏はこれを白淨信心といふ一つに約めてあり龍樹菩薩は勝義、行願、三摩地の三つに分けてあり、大師様は信心、大悲心、勝義心、大菩提心の四種に分類なされてあります。これは同じことでありまして、詰り龍樹菩薩が三通りに分けた菩提心を善無畏三藏が白淨信心の一つに約め、それを大師が兩方を合せて四つとなされたのでありまして内容は同じことです。この菩提心、即ち佛に成らうといふ心、この佛に成らうといふ菩提心といふものが佛に成る所の種であり、又淨土往生をする所の種であります。所が眞言宗の安心和讃に「口唱くしやうの功力を因として」といふ言葉があるがこれはどうも宗意の上から申して都合が悪いと思ひます。口唱は三密の中の口密であるから行である。決して因ではありません。金剛頂經のお説も大日經のお説も、大師のお説も皆悉く菩提心を以て往生成佛の正因と決定してあります。安心和讃の

作者がどういふ考で口唱を因としたか知りません。けれども、これは宗義に背いて居るから改正せねばならぬと思ひます。我々の日々の仕事は佛の行ひになるかならぬかといふことも菩提心の有るか無いかといふことによつて決る。例へば今度の事變に於て我々が戦つて居る。その戦争して居ることが不動明王の立派な御精神の働きになるかならぬかといふことは、その戦争に従事して居る我々の心の中に菩提心が有るか無いかによつて決る。菩提心がなかつたらそれは普通の人の戦争といふことになるが、菩提心によつて戦争して居ることになつたらそれが不動明王の働きになる。この菩提心の有るか無いかといふことが我々の日々の生活が佛の生活になるかならぬかといふことの岐れ目でありますから、これは非常に重大な事であります。

物の價値を決めるのは形の上からばかりでも決められない。精神の上ばかりでも決められない。形の上と精神の上と両方から調べ上げないと本當の價値が分らない。極く卑近な例を挙げますと、今このお寺の門前で立派な風をした若い人が急病で倒れて居る

と假定致します。そこへ本當の親切のある人が通り掛つて見て、これは捨て、おけぬと早速走つてお醫者さんを迎へて来て、薬を上げたり水を飲ましたり撫でたりして看病して上げる。この人は心の底から本當の親切をやつたのであります。所がその人は急ぐ用事を持つて居るので何時迄も行旅病人の世話ばかりして居れないから、出来るだけの世話をしておいて行つてしまつた。其後へ慾の深い人が通り掛り、見た所が相當立派な風をした若い人が倒れて居る。これは一つ親切ごかしに色々世話をしてやればお禮に反物の一反も呉れるであらうといふ慾な考を起しまして、洵にあなたは氣の毒なことだから世話をして上げる。私は何區何町何番地の何某といふ者だと、あとで反物を貰はうと思ふから住所姓名を詳しく云ふ、手で病人の背中をさするのは同じことだけれども、精神の方面から考へると第一の人と第二の人とは大分違ふて居ります。第三番目に泥棒根性の者が通りかゝり、行路病人の立派な風采を見て、懐ろに相當澤山な金を持つて居るであらう。併し晝間でもあり通行人の多い場所のことゆへ懐中へ手を入れて強奪すること

も出来ぬから、表面親切を装ふて背中を撫で、介抱し、隙を見て其金を盗み取ろうとする。これを表面から見ると撫でたりさすつたりするのは三人共同じことです。併し精神の方面から考へて見ると、第一の人は眞實の親切、第二の人はお禮の反物が目的、第三の人は懐ろの金が目的、非常な違ひがある。この非常な違ひのある精神の中を誰が知つて居るか、無信仰の者からいつたら、これは俺だけが知つて居るのであつて他の誰も知らない。所が信仰のある人からいつたら、これは神が御承知である。佛が御承知である。自分のして居るこの仕事が菩提心によつて佛のする仕事をして居るのである。世間の人には分らなくともお大師様が御承知である。觀音様が御承知である。かういふ信仰を持つて居る人であつたならば世間の人が知つて呉れやうが呉れまいがそんな事には一切頓着しない。褒めて呉れやうが呉れまいが少しも意に介しない。神を相手に、佛を相手に尊い生活をして行くことが出来る。信仰が誠心の人を養成する上に必要なことは之を以て知ることが出来るのであります。大師様が同行二人と仰せられた。といつても別

に大師様のお言葉に同行二人といふお言葉がある譯ではないが、大師様のお慈悲の思召を解り易く約めていへば同行二人といふことになる。それは眼に見えないわしが附いて居るといふことを忘れるなどいふ。この大師様の尊い思召を我々は忘れないやうに行かなければならぬと思ひます。所が兎角人間といふものは淺ましいもので眼に見えない事はつい忘れ勝になり易いのです。それですから我々は常に佛様の事を思ひ出す機會を作るといふことが最も必要であると思ひます。御飯を食べる時にでも手を合せて佛様の事を思ひ出す。夜寝る時にも手を合せてお大師様の事を思ひ出す。さういふ風にして常に佛様を思ひ出す機會を作るといふことが實際信仰を練つて行く上に必要なことです。在家のお方にもさういふ事をお勧め願ひたいと存じます。

かういふやうな譯で菩提心といふものが非常に尊いのでありますから、お大師様は三昧耶佛戒儀の中に菩提心戒の戒相を四重禁と十重禁との二た通り御説きなされてあります。其四重禁の第二に

菩提心を捨離すべからず

と仰せられ、十重禁の第一に

菩提心を退すべからず

と仰せられてあります。

そこで我々はこの眞言宗唯一の戒法である所の菩提心戒といふものを是非片時も忘れないやうに守つて行つて、その菩提心を根本として總ての仕事をして行くと、かうなつたら、する事なす事が悉く佛の道に叶ひ、力相應身分相應に佛の行ひが出来て行く。かうなつて來ると當相即道といふ宗意が現實の上に働いて來ます。

へ、菩提の行

その次は菩提の行といふこと、菩提心を常に失はぬやうにして居ると今度は菩提の行といふものを實修しなければならぬ。行によつて信仰心がだん／＼深くなつて行くので

ある。近來は信仰を練るに就ても唯話ばかりを聴くのでなしに行の伴つた話を皆が要求するやうになつて來て居るが、信仰と云ふものを眞面目に考へたならば斯くなるのが自然の成行きであります。菩提の行は申す迄もなく聲の上の行、體の上の行、精神の上の行、これが三密の行です。そこでこの體の行でありますが、これが近來戰捷祈禱などに就てお百度を踏んだり、或は私共の國でいつたら金比羅さんへ日參をするとか、善通寺へ日參をするとか致します。精神の中の信仰が現れて體の苦しさを忘れてお百度を踏むとか、路の遠さを忘れて金比羅さんへ日參をするとか、いふ事は非常に尊い事であります。佛様を信仰さへすれば何處に居つて拜んでもよいぢやないかと云ふが如きは取るに足らぬ空論であります。寢床の中で拜むよりも、起きてお佛壇の前で拜むの方が信仰が勝れて居る。我家の佛壇を拜むだけで満足せずに更に檀那寺の本堂迄詣つて來る人は信仰が熱烈です。更に進んで高野山の奥の院にお詣りする人は最も信仰が熱烈な人であります。信仰といふものは矢張り體の行の上に現れて來なければ本物ではありません。

眞言宗は特にこれを喧しく教へる宗旨でありますから、在家を教化して行く上にもこの方面のことを十分説かなければならぬと思ひます。

それから精神で佛様を常に忘れないやうにするといふことはこれはもう申す迄もない事ではありますが、聲の上で佛様を拜んで行く行き方に付ては御承知の通り大師様が秘藏記の中に五種念誦法といつて念誦の仕方を五通りお挙げなされてある。金剛頂經あたりでは四種念誦法といつて四通りある。まだその外に降魔念誦といつて修験道の人がよく行はれる大音聲を發して拜む念誦の仕方もあります。念誦の仕方も色々ありますが、お互専門の者が念誦をします時には、奥深い意義を知つて念誦せねばならぬが、一般の檀信徒のお方に對して念誦を勧めて行きますに付ては、さういふ専門的な話でなしに極く常識的な話で念誦を勧めるやうに致したいと思ひます。そこで常識的に説くといふことになる。私はかう思ふのです。口で眞言を唱へるとか或は佛の名號を唱へるといふことには色々尊い功德がある。第一番に、人間の口といふものは體中で一番ひまなものであ

るから小人閑居して不善を爲す、で、ひまにまかせて悪いことをする、人の惡口を言つたり、二枚舌を使つたりして口の作る罪といふものは相當澤山ある、昔から言ふ通り口は禍の門であります。そこでひまなこの口に一つ仕事を言ひ付けて、佛様の名號を唱へさせ眞言を唱へさす。さうすると名號や眞言と人の惡口とは一緒に言へるものでない、わざと言つたら言へる「南無大師遍照金剛、向ひのお婆さんは各ん坊だ」、わざと言へば言へるけれども、自然には言へない、さうすると口に南無大師遍照金剛を唱へると自ら嘘を言はないやうになる。二枚舌を使はぬやうになる。前にもちよつと申しましたやうに佛の名號や眞言はこれが一つの佛様である。大師様が「一佛の名號を禮して無量の重罪を消し一字の眞言を誦して無邊の功德を得」と仰しやつて居る。眞言念佛といふものは佛の功德が悉くこもつて居る聲の上の佛様である。その聲の上の佛様を我々が自分の口から一遍、二遍、三遍と吐き出す。それが大變功德になる譯です。それで一方では罪を作らず。一方では功德を積むといふことになる。我々はお佛壇の前に坐つて居ても兎

角精神が横へ向きたがる。耳に聲が聞えたらその方に精神が向いて行く。眼に物が見えたら精神がその方に向いて行く。これはどうしても實際の問題です。宗教はこの事實問題を根本にして行かなければならぬ。二階から目薬をさすやうな話は話だけはよいが實際には何の効果もない。現實の人間を有りの儘に見てそこを出発点としてそれを導いて行くといふのでなかつたら教化の實蹟は擧らないのであります。そこで我々は佛前に坐つて居つても兎角佛様の方に精神が向きにくいから、毎日々々の仕事をして居る時には尙更ら佛様の事が忘れ勝になる。所が自分の口に眞言念佛を唱へて居ると自分の唱へた聲が自分の耳に聞える。それで忘れて居つた佛様のことを想ひ出してお慈悲を喜ぶといふ氣になつて来る。これは實際やつて見たら解る。そこで在家の人にこれを勧めなければならぬ。日本佛教各宗の中で眞宗の信者は常によく南無阿彌陀佛といふことを唱へます。私は生れが眞宗であります。あれは非常に善い事であると思ひます。眞言宗の在家の方にもあゝいふ善い事は勧めて行かなければならぬと思ひます。それから又た聲に

よつて自分の精神統一が出来る。精神統一には眼で物を見て精神を統一するといふ方法もあり、又耳に聲を聽いて精神を統一するといふ方法もある。子守がねんねこゝと歌を唄ふので子供が眠つてしまふ。あれは子供の精神が聲を聽くのに統一するから眠るのです。聲に出してお經文を読むのと口の内で讀むのとは精神統一の上に非常な違ひがあります。それは實際やつて見たら分ります。矢張りお經を讀むのは相當聲を出して讀むのがよいと思ひます。勿論大師が五種念誦法を御説きになつて居るのであるから、其中の何れでも宜しいのであるけれども、實際のやり方から考へて見るとどうしても聲に出して行く方が信念を養成する上に効果が多いと存じます。併し私がそれだから皆様もさうやつて戴きたいといふやうな失禮な要求をするのではないが、これは一つ御参考にお聽きを願ひたいと思ひます。殊に眞言宗は宗旨の名前迄眞言宗といふ聲を表にして宗旨の名前を附けて居る位だから、聲によつて佛を拜むといふことが宗門の特色になつて居るのであるから、是非これを勧めるやうに願ひたいと思ひます。

ト、祈禱の眞意義

九二

それから次に祈禱のことを少し申上げたいと思ひます。今度の事變に付て各地方とも神佛に祈つて居りますが、この祈りの事に付てこの世の命を延ばして貰ひたいとか、福を授けて貰ひたいとか、災難を拂つて貰ひたいとかいふ信仰は功利的な信仰で極く低級な信仰であるから、眞言宗はさういふ低級な信仰を説いてはいかぬと云ふ人がある。單純な理窟からいつたらそれに違ひないが、併し眞言宗は生の宗教である。現實の人間生活を俸せに導いて行くといふことが眞言宗の教であるならば、必ずしもそれが功利的の信仰だからといつて一概に排斥する譯にいかぬと思ふ。第一人間といふものを神様や佛様のやうに利益も求めず名譽も求めない者のやうに決めて掛ればさういふ理窟も立つが、御互に誰でも長生きがしたい。病氣になれば早く癒りたい。貧乏よりも金を持つて居る方がよい。誰でも皆さう思つて居る。所がさういふ事を思つて佛様を拜んではいか

ぬぞといふことになつたら、理窟はそれで立つかも知れないけれども、實際の信仰といふものがそれで本當に起るものかどうかといふことは、有りの儘の人間を有りの儘に見て御互が考へなければならぬと私は思ひます。商賣繁昌するやうにと生駒の聖天さんや信貴の毘沙門さんへ祈る人が澤山あるが、さういふ信仰を低級な功利主義な信仰だから詰らぬといふて排斥するのが果して眞言宗の教かどうか、もう一遍考へ直す必要があると思ふ。

養生せずして病氣が平癒するように祈り、勤儉を實行せずして財産が殖えるように祈る如きは、横着な考であるから甚だ宜しくないけれども、養生しつ、病氣平癒を祈り勤儉しつ、福德増殖を祈るのは決して悪いことではないのであります。唯單に長命したいからとか金が欲しいからとか云ふ祈りは、本能の欲望を満足するための信仰ゆへ感心出來ぬけれども、金を儲けたら其金を何に使ふか長命したならば其生命を何に使ふか、言葉を換へて云へば現世の福利を祈つて之を得たならば其後はどうするのか、其後の問

題、これが現世祈禱に付ては最も重要な問題であります。これさへ間違はぬように決定した上の祈りであれば、初めの入り口は功利主義でもよいのであります。普通一般の間は功利主義の思想からでなければ信仰の道に入ることは出来難いのであるから、此門から引入して次第に高尚な信仰に導いて行くことが必要なのであります。

功利主義でなければ信仰の起らない現在の人間を掴まへて、そんな所から這入つて來たらいかぬぞと拒絶しては大多数の人間は信仰の道に入ることは出来ません。

現に諸佛の誓願の中に病氣平癒、延命長壽、福德増進、智慧開發などがある以上は、これ等の祈りをするには何等不都合はないのみならず。其所に廣大無邊なる佛の慈悲を窺ひ知ることが出来るのであります。私自分のことを考へて見てもさうです。私は別にこれといふ人様に申上げるやうな信仰を持つて居りませんが、たとへ少々でも佛を拜む氣になつたのは何が因であるかといふと、私が體が弱いのが因である。私が一遍に一升の飯を食ふといふやうな壯健な體の持主であつたら恐らく信仰が起らなかつたかも知

れぬ。詰り不幸が信仰の因になる。大師様が御祈禱に四種の壇法五種の壇法をお傳へ下され、大師御自身が御一生の間何事を成すにも常に祈りつゝ、御活動なされて居られる。かういふことから考へても現世の福利を祈つてはいかぬといふやうな説は人生の實際に當笹らぬ空論であると私は思ひます。我々の教化といふものがそんな二階から目藥的な教化では効能はありません。それで私共は現世の福利を與へて下さる佛の誓願があり、大師がその御祈禱法をお傳へなされて居るのだから誰に憚ることもなく熱心に之を説かねばならぬ。そうして現世の功利的の目的を達したらそれから先の問題はこれだといふことを誤りのないように教へたならば決して單純な功利的な御祈禱ではなく、佛の行ひをして行く一つの準備行爲といふことになつて來る。全體に奉仕するために自己を充實する所の尊ふといひになつて來るから、眞言宗の即事而眞當相即道の教に合致するのである。元來御祈禱は誠心の現れです。人間といふものはまさかの時には必ず祈るといふ心が起る。支那で「人窮すれば天を呼ぶ」といふ言葉があり、我國でも「叶はぬ時の

神頼み」と云ふ言葉があるが、人間といふものは意識するにせざるに拘らず皆この祈禱する心を持つて居るものであります。

そんなら人間はどうしてさういふ場合に祈る心が起るかといふこと、それは人間が佛の子として生れて來て居るからである。それだから自分の力に叶はぬことが出來た時には親を呼ぶ。本に縋る。だから祈禱といふものは人心自然の要求です。日本の國でもさうです。日本に宗教のまだ無い時に日本國民は既に祈つて居るのであります。祈りの儀式とか、祈りの方法とか、祈りの理論とかいふやうなものは宗教が発生して初めて教へたのであるけれども、祈る心といふものは人間が生れ付持つて居る天性です。だから今度のやうな事變が起つて來ますと、日本全國到る所に於て皇軍の武運長久を祈つて居ります。これは日本國民の誠心の現れである。人間が神佛に祈るといふこと程嚴肅な尊い意味を持つた宗教的な行ひといふものはない。この祈りといふことが宗教の起源になる。又この祈りが宗教の本質です。或る宗派では現世の祈りをしたら雜行雜修になるから祈

禱をしてはならぬと反對致しますけれども、其宗派の門徒の者は皆遠慮なしに祈つて居ります。人心自然の要求といふものは教權の力や理窟の力で押へることが出来るものでない。眞言宗ではこの祈禱といふことに付て最も完全な方法もあり、理論の説明もあり、さうして大師が御自身に御祈禱を爲されて我々にお手本をお示し下されてあるのだから、この時この際國家の非常時に對して思ひ切つて御互は祈らなければならず。又檀家の人にも勸めて大いに祈らさなければならぬと思ひます。祈つたらごれだけの靈驗があるかといふことは次に起る問題だ。靈驗があるかないか知らぬが、眞面目になり本眞劍になつた場合には祈らずに居れないといふのが人間の誠心である。我々の家庭でも獨り子が病氣になつたら博士に診て貰ふ。高い藥を服ませる。熟練した看護婦を附ける。それで癒らなければ仕方がない。そんなことは赤の他人の言ふことです。眞實の親はそれで安心出來ないから神に祈り佛に祈らずに居れない。これが親が子を思ふ誠心である。所がこの祈りに付てその靈驗がこちらの希望する通りに現れる時と現れない時とがあ

る。それを我々がよく知つておかないといふと、折角信心して最後に佛様と仲違ひをするところがある。

これは祈りに就て最も重要な問題であります。この靈驗といふものにも凡そ限界があるといふことをよく承知しなければならぬ。何ほ普賢延命菩薩が長生きをさせる御誓願があつても、五百年も六百年も生きさせて呉れるものでない。それから祈禱が効く効かぬといふのは單に拜んだといふ一事のみで定まるものではなく、いろ／＼な事情が綜合して一つの結果といふものが現れるのだからそれを考へなければならぬ。のみならず祈禱の靈驗といふものが現れて来る。その現れ方、それは普通の者は唯自分の思ふ通りになつたら靈驗があつたと考へる。それは勿論靈驗であるけれども、佛の慈悲の方便は我々の考へて居ること、は逆に来る場合があります。これを逆縁の恩寵といひます。この逆縁の恩寵といふものを難有く受取ることの出来る人であつたら御祈禱しても神様、佛様と仲違ひをすることはない。それは大體神佛の思召といふものは我々の爲になるやう

に、我々を段々立派な者にして下さるやうにといふのが神様、佛様の思召である。我々の考へて居ることには自分の得手勝手なことが多いのである。佛様に向つて色々なことを祈るのは恰も子供が親に向つて色々な事を頼むのと同じことである。子供がお母さんにこれを買つて呉れと言つても、それは買つて呉れることもあり、買つて呉れないこともある。買つて呉れるのが子供のためになる場合には其要求に應ずるけれども、子供のためにならぬ場合は其要求に應じない。子供の要求に應ずるも親の慈悲であり、應じないのも親の慈悲である。神佛に祈りをする者はこの逆縁の恩寵といふことを能く知らねばならぬ。

愛媛縣周桑郡丹原町久妙寺の住職金崎義光師は、先年私と共に仁和寺の役員を勤めた人で、至つて懇意な友人であります。本年三月讃岐坂出町の定光院へ布教に来られた。其時私も丸龜市の圓光寺で布教を致して居りましたので金崎師が來訪せられました。同師は相當酒の飲める方であるので晝食の際酒を出したところが之を飲まないの

で、不思議に思ふて其理由を尋ねますと、

實は私は本年厄年に當るので厄拂のために一月早々伊勢の大廟に參拜して厄難消除の御祈禱を致したが其日俄に胃腸カタルを發して閉口した。そこで一體これはどういふ譯かと痛い腹を抱へながら考へた結果、從來自分が酒を飲んで一向衛生に無頓着であつたから、天照大神が今後酒を慎まねば胃腸病で仆れるぞと御警告なされて下されたもので、これが大廟參拜のお蔭であると思ふたので、夫れ以來萬止むを得ざる場合は少々飲むけれども成るべく飲まぬことにして居るが、ブク／＼肥滿して居つた身體が引締つて來てまことに氣分がよい。

この話でありました。これが即ち逆縁の恩寵であります。僧侶の中でも此の逆縁の恩寵に氣の附く者は尠ないのであるが、金崎師が其所に氣が附いたのはなか／＼偉いと思ひます。

祈禱の靈驗がどういふ形で現れて來るかといふことはなか／＼我々に分らぬ。さうい

ふ風に逆に來ることもあり又順に來ることもあり、或は色々の事情で全然來ないこともある。それですから總てを神佛の御計ひにお任せ申して祈らねばならぬ。在家の方に話する時にはかういふ點をよく行届いて説明しておかないといふと、あとで佛様と仲違ひすることが出來ます。

又中にはかういふ事を言ふ人がある。佛様は親で我々は子だ。子の方からどうして呉れ、かうして呉れといふことを注文しなくとも佛様の方でチャンとよいやうにして呉れる。然るに子の方から強請がましく祈願するのは、親の慈悲に信賴せぬより起ることで宜しくないといふ人がある。これは親の存在だけを認めて子の存在を認めない者の云ふことである。宗教といふものは親である佛様と子である我々との二つが揃つた所に成り立つものであるから自分と云ふものを全然沒却して何も彼も佛様に任してしまふといふのでは別に信心する必要もなくなると思ふ。我々は佛の慈悲に信賴すればこそ祈願するのである。親の慈悲を理由として子の要求を差し止めんとするが如きことは、理窟に

も合はぬが實際にも當て筈まらぬ。親が子の言ふ通りして呉れるかごうか知らぬが、子としてあゝして貰ひたい。かうして貰ひたいと頼むのは何も差支はないことです。子が親にたよると云ふことは、親子の關係上より來る人心自然の要求であるから之を抑止することは出来ません。

祈禱の理論に付ては私が申上げなくとも皆様よく御承知の通り自分の信仰の力と、如來の慈悲の力と、それから法界の融通の力と、この三つの力が和合してそこに靈驗が現れて來るのでありますから、別に申上げる必要はないと思ひます。

子、追善回向の意義

最後に追善回向のことに就て申上げたいと思ひます。眞言宗が現世爲本の宗旨であるからといつて死者の葬式や佛事を疎かにしてはなりません。そこで死んだ人を拜む追善供養の意味を十分に徹底しておく必要がある。この死んだお方を拜んでその功德が死者

に届くといふのに付ては三つの理由がある。一つは生命の不滅、一つは加持感應、一つは法の力、この三つの力があると思ふ。御當地は知りませんが、田舎へ行きますと近來追善が非常に疎かになりまして、所によつては檀那寺の住職が佛壇に向て拜んで居ると、後ろに居る親戚の人々が米が安いとか何とか言つてベチャ／＼と世間話をして居りますが、あれは祖先の追善供養に詣つて來た態度としては甚だ宜しくない。親戚の者が久し振に顔を合せたのだから米の高い安いもよろしい。孫子の話もよろしい。色々話し合ふのもよろしいが、それは讀經の前か後かにしたらよい。檀那寺の住職が拜んで居る間に「何もさういふ世間話をしないでよいぢやないか」かう言ひますと「あんたさう言ふけれども、お住持さんの讀むお經は聽いて居つても一つも解らない。そんな解らないお經を黙つて聽いて居るのもしんき臭い。それだから自然世間話をするやうになるのです」「さうですか。解らぬお經を無理に聽かないでもよいぢやないか」「そんならどうしたらよいのですか」「それは折角詣つたのだから、心の中に今日弔ふ所の聖靈の

ことを憶ひ出して腹の底からお眞言なりお念佛なりを唱へて三十分なり四十分なりの御回向をしたらどうか、それが爲に來て居るのぢやないか、三十分か四十分間それだけの誠を運ぶことが出来ないといふことでは折角法事に詣つた所詮がないぢやないか、かう言つて私はよく不足を言ふのであります。それでも讀經の間後ろに坐つて居るのはまだよい方で、所によると檀那寺の住職が讀經して居る時には誰れ一人坐つて居らぬ。ハテナ此家には親類がないのか知らんと思ふて居ると、お膳を据えかけると何處からかぞろ／＼と出て來る。そこでおなた方は祖先の追善に參詣したのかお膳を食べに來たのかと小言を云ふたこともあります。

このように追善回向の佛事が疎かになるのは其意義を知らず唯だ義理一片で勤めるためであらうと思ふから、充分に説いて聞かさねばならぬことであります。

追善供養をするのには先づ第一番に生命の不滅といふことを知らねばならぬ。今度の支那事變の戦死者の追弔會をするのでも、國家の爲に亡くなつたお方の生命は不滅で今

に生きて居られる。其英靈を祭り國民がその人々の國家に對する甚大の功勞を感謝し誠心を捧げて御回向を申上げるといふのですから、生命不滅といふことの根本の信仰から出た追弔會でなければならぬ。普通一般の法事を勤めるのもこれと同じことで生命不滅の信仰が根本とならねばいけません。ところが死んだ後の生命がどうなるかといふことが一番むづかしい問題であります、これが宗教の二大原理の一つであるから出来る限り説明をせねばならぬ。眞言宗の教理から言へば肉體を離れた靈魂といふものはある筈はない。肉體と精神は一生命の両面であるから、風船玉が飛ぶやうに肉體を離れた精神が未來の世界に飛んで行くことはいふ。生命の行く所どこにでも其世界相應の肉體と精神がある。お經の上では佛様が色々お説きなされて居るが、我々が自分の眼で見て來たものでないから話をするのも六つかしく又聞く人にも解りにくい。そこで私はこの生命不滅といふお話を在家の方にする時には理論を避けて實例を擧げるといふことにして居ります。理論の方を先に言ふと言ふ者も説きにくいし、聽く者も解りにくい。それより

も實例を挙げると聽く人が早く領解する。大體理論といふものは後から出来るもので、事實が先にある。かういふ不思議な事實があるがこれは一體どういふ理窟から現はれたのかと其理論を研究するのである。所が人間といふものは勝手なもので、先に理窟の型を拵へてこの理窟の型に這入らぬものは間違だと、かういふ事を言ふ人があるがそれは大きな間違だ。事實が先にある。學問でも宗教でも皆事實が先にある。そこでその事實談をする。その事實談は古い昔の事實談でなしに、今度の支那事變に就ても人間は死んでそれぎり無くなるものでないといふことを證明するに足るべき事實が澤山にある。その事實の話をする。さうすると成る程といふことが解つて來るから、常に新聞を読むのでも注意して教材を拾はねばならぬ。

それから次に加持感應、これが又今度の戦争で向ふで戦死した人のことをこちらで家族が不思議な夢を見たとか、佛壇の位牌が皆倒れたとか色々な不思議なことがある。これに付て私感するのは、今度の出征軍人がこちらに残つて居る自分の家の者に色々不思議な靈感があるのは多くは母親である。これは新聞を読む時によく注意して御覽なさい。大抵はお母さんです。私共の國でもさういふ事が澤山ありますが大概皆お母さんです。これは我々教化に従事する者として見通すことの出来ない重大なことです。父親にさういふ夢を見せないでなせ母親に夢を見せるか、それは出征軍人が死ぬる時に母のことを想ふのです。勿論それは両親なり皆のことを思ふであらうが、特に母のことを思ふ。小さい時分から母の膝の上で母の乳房を啜へさせられてさうして育て上げられたから、人間の頭の中にはお母さんといふ觀念が最も強く且つ深く浸み込んで居る。それだからまさかの時分に母を思ひ出す。其念力が故郷の人に感通するのであります。此の如き事實によりて子供を教育する上に母の感化力が如何に強いかと云ふことが解ります。

日本帝國の將來は多事多難であるから、第二の國民は現在の我々より以上の立派な人物でなければなりません。斯る人物を養成するには婦人が國家の現在及び將來のことを能く考へて、其強い感化力を以て小供を教育して貰はねばならぬ。隨て婦人傳道に従事す

るお互は此點を充分に呑み込んで國家のために有効なる教化を布かねばならぬと思ひます。加持感應の理は神佛と人間との間にも働き、死んだ人と生きて居る人との間にも働き、生きて居る人同士の間にも働くものでありますから、この世界に遣つて居る我々が死んだあの人の爲だ。この子の爲だと思つて誠心こめて拜んだら其誠心が死者の靈に通ずるのであります。

それからもう一つは法力不思議です。眞言宗は法力不思議を以て宗門の特色として居る。法といふのは御承知のドラマといふ梵語を翻譯したものであるが、佛教のお經文中には法と云ふ言葉をいろいろな意味に使つて居ります。法門とか教法とか云ふ時の法は佛の説いた教のこと、諸法とか萬法とかいふ時の法は宇宙の現象、天地萬物のこと。人法といふ時の法は主觀に對する客觀のこと。法性といふ時の法は宇宙の本體、萬物の本體、大師様が法佛と仰しやつて居りますが、法佛といふのは法身如來のこと。その他法爾とか法然とか法位とか色々な意味にこの法といふ文字を使ひます。今私が法の力と

申すのは佛の説いた教の力を言ふのです。所謂眞言宗の教法です。お大師様は法の力といふことを非常に強調してござる。大師様の御文章を拜見致しますると「此の法は」といふことをよく仰せられてある。「此の法は諸佛の肝心國の靈寶なり」、眞言宗は法に功德があるといふのです。法に功德があるといふことになるさかうなるのです。今茲に百圓札がある。さうするさこの百圓札は大臣が使つても百圓、乞食が使つても百圓、使ふ人の地位によつて持つて居る品物の相場が變るのでない。持つて居るその物に價值がある。眞言宗は「此の法は」といつて法に功德がある。法に功德があるといふことになるものだからこの法を修行せねばならぬ。そこで眞言宗で追善回向の時に修する土砂加持法、流水灌頂法、理趣三佛法、光明三佛法と種々ありますが、この法に功德があるのだから輕卒に修してはならぬ。誠心をこめて法の如く丁重に勤めねばならぬ。此法に不思議の功德があるといふことに就ては實例が澤山あります。私自身も色々な經驗を持つて居りますが時間が無いから略します。

この生命の不滅を確信し、加持感應の力を確信し、さうして法の力の不思議な働きを確信した上に於て追善回向をせねばならぬ。その追善回向は何が目的であるかといふと、その目的は宗教上の目的が一つ、道徳上の目的が一つ、運命上の目的が一つ都合三つであります。成三菩提の爲とか、往生淨土の爲とかいふのはこれは宗教上の目的です。死んだお方が未來で成佛なさるやうにと、いふのだから宗教上の目的です。亡くなつた祖先に對する御恩報謝の爲に佛事を勤める。これは道徳上の目的です。今迄は大抵さういふ風な事だけの話をして居つたのでありますが、私はもう一つ進んで家運繁榮といふ上から追善供養といふものの意味を説きたいと思ひます。又是非皆様もこれを説いて戴きたいと思ひます。この間亡くなりました讃岐の童銅龍純僧正はこの道に於ける専門家であつて眞言宗の第一人者であつた。あの人などの説を聽いて見ると、家の運命といふものが盛んなるのも衰へるのもその根本は何であるかといふと神様、佛様、先祖、これだけだ、詰り幽明界といふものが本になつて現實の世界といふものが出來て居るのだから、現實の世界の總ての事は幽明界が原因である。この幽明界といふものを研究せずして、この建物はこつちへ移したらよいとか、此處の便所はこつちへ移したらよいとか、さういふ皮相一片の家相では徹底せぬ。更に進んでこんな所にかういふ建物があるのはなぜであるかといふ所迄突き詰めて研究した家相でなかつたら駄目だ。首に腫物が出來たといふことは體の中に毒があるから出來たのだ。それを上から藥をつけるだけでは十分に癒せない。體の中の毒を除くといふことが更に必要な事ではないか、腫物だけを切つてしまつて其處の部分が癒つても、體に毒が残つて居つたら又何處かに出て來る。外からも手當を加へて治療し内からも毒を除くといふことになつて初めて腫物が完全に治療出来る。家相もかういふ方法を以て行かなければならぬといふのがあの人の説です。そこで私は、君の説は實に天下一品で私も感心して居るが、君一人で幾らさう言つて居つた所で弘まらぬから、お弟子を澤山拵へて大いに弘める爲に講習會をやつたらどうかと、私は遠慮なしに言つたら、いやわしも今迄さういふ事も考へたがつい忙しい爲に出

來なかつたと言ふて、其儘になつて居りましたが、今度ヒョツとさういふ氣になつて、來月七日から私共の結衆でその方の講習をして呉れるといふことになつたのです。これは有難いと我々も喜んで居りました。その途端に去る二十三日に急性心臓麻痺で遷化せられました。洵に惜しい事をしたと私は思つて居ります。あの人一度家相を見て貰つたら不信心な者でも心から信心な者になります。それはその筈です。家相の根本の原理が神様、佛様、先祖とか言ふのですから、どうしても神佛を大切にします。先祖を大切にしようになるのであります。これが普通の私共の説教や演説を聴くのと違ひまして、事實それが孫子の運命、家の盛衰に關係するといふのだから、話を聴くだけでも本眞劍で普通の説教の聴き方とは力の入れようが違ひます。日本の國の單位は家であるから自分の家を繁昌させ子孫が永く續くようにするといふことが國家に對し祖先に對する尊ぶべき務めである。さうすると佛事を勤めるといふことも唯宗教上の成三菩提の爲と道徳上の報恩謝徳の爲ばかりでなしに、もう一つ現實の問題としては家運繁榮の爲に祖先

を大切にしなければならぬ。祖先は木の根である。眼に見えぬ世界には這入つて居るけれどもそれが家の本であり家族の本である。根を大切にしなければ枝葉は決して繁昌するものでない。その根を大切にせよといふことが亡くなつたお方を拜めといふことだから、この意味をよく知つて法事を勤めなければならぬといふことこの話をする必要があるので思ひます。これは何も童銅僧正のように家相の奥義を知らない者でも、常識的に考へたら誰が考へてもその通りであります。かういふ譯で祖先の追善回向といふことの六つの意味を在家のお方に共々にお話をして戴きたいと思ひます。

以上甚だ雜駁なお話を申上げましたが、少しでも御參考になる點がありましたら洵に倅せに存じます。もし又私の申上げた事が皆様の御意見に副はぬ點がありましたら、御遠慮なく仰しやつて戴いたら共に研究を致したいと存じて居る次第であります。長時間御静聴下さつたことを厚く御禮申上げます。(完)

昭和十四年一月十五日印刷
昭和十四年一月二十日發行

定價三十錢
送料共

眞言密教
要諦

講述者 眞井覺深
發行者 中井龍瑞

印刷者 澤田眞三
大阪市東區南本町二丁目一九

印刷所 株式會社印刷工廠
大阪市東區南本町二丁目一九

發行所 古義眞言宗々務所
和歌山縣高野山・振替大阪七六五四番

教學叢書

◎教學文書第一輯 上田天瑞教授述

本地垂迹説と兩部神道

(定價十八錢送料共)

◎教學文書第二輯 眞井覺深僧正述

國民精神講話

◎教學文書第三輯 榊尾祥雲教授述

眞言安心讀本

(定價六十錢送料共)

◎教學文書第四輯 岩原諦眞僧正述

法會儀式の解説

◎教學文書第五輯 高橋慈本僧正述

眞言密教の家庭生活

(定價二十五錢送料共)

◎教學文書第六輯 中井學務部長編

聖訓大日の光

(定價一圓六十錢送料共)

◎教學文書第七輯 眞井覺深僧正述

眞言密教の要諦

(定價三十錢送料共)

◎教學文書第八輯 和田高大學長述

弘法大師の護國精神と教化

(定價 送料共)

時局叢書

◎時局文書第一輯 陸軍歩兵中佐 山之内二郎氏述

國家總動員法の 本質とその運用

◎時局文書第二輯 商學博士 武田鼎一氏述

戰時經濟統制に就て

◎時局文書第三輯 陸軍歩兵大佐 末藤知文氏述

防共と國防問題

◎時局文書第四輯 文部省教學官 小川義章氏述

思想問題と國體明徴

◎時局文書第五輯 外務省事務官 土屋華氏述

時局と國際情勢

川人宥賢師編述

寺院に於ける 兒童教化事業

(定價二十錢送料共)

岩根智俊師編

日曜學校聖典

(定價三十錢送料共)

發行所

古義眞言宗々務所

和歌山縣高野山 振替大阪七六五四番

388
11

...

...

...

終

